

かぐらおか

第 19 号

昭和54年 3月15日

編集 旭川医科大学
 厚生補導委員会
 発行 旭川医科大学教務部学生課

(題字は山田守英学長)



研究棟及び附属図書館の夜景

内 容

第一期生の卒業を祝う.....山田 守英... 2	水銀の動態 一生態学から臨床まで.....土井 陸雄...16
卒業生の諸君へ.....小野寺壮吉... 3	ホルモン産生下垂体腺腫の臨床...米増 祐吉...17
クラブ活動を振り返って.....沖 潤... 4	創傷と病気.....藤田 昌宏...18
思い出すままに.....秋山 建児... 4	研究室紹介.....石橋 宏...19
6年間の思い出.....安江 悠子... 5	サークル紹介.....20
旭川医科大学設立経緯及び沿革..... 6	奨学制度について.....27
新任教官紹介.....14	スキー遠足.....27
就任にあたって.....宮岸 勉...14	第2回歩くスキー講習会.....27
宮岸新教授のこと.....松嶋 少二...14	卓球講習会.....27
旭川医科大学談話会.....15	第5回全学スポーツ大会.....27
脊髄牽引障害に関する実験研究...原田 吉雄...15	道路交通法の一部改正について.....28
The Study of English at the Idai D. Michael Flint...16	窓 外.....並木 正義...28



第一期生の卒業を祝う

学長 山田 守 英

わが旭川医大の第一期生諸君は、大学における全課程を終えて、いよいよ学園を巣立つ日を迎えることになった。大学はこの日の到来をどんなにか待ち望んでいたことであろう。ここに諸君の卒業を心から祝い、輝かしい未来への飛躍を期待しつつ、歓送したい。

顧みれば、本学は昭和48年9月設置され、第一期生の諸君は、晩秋11月という異例な時期に入学した。当時大学には校舎もなく、偶々空家となっていた小学校の古い木造の建物を仮校舎として、授業が開始された。旭川の11月といえば既に寒さも厳しく、講義室にはストーブを焚き、窓には防寒のためにビニールを張り、酷暑のさ中には、諸君は外套を羽織ったまま、凍えた手でノートにペンを走らせていた。しかも開講の時期が変則であったので、所定の教科を短期間に完了するために、日々早朝から夕おそくまで講義は続けられた。しかし、教官も諸君も共にこの悪条件をよく克服して、所期の目的を達することができた。諸君は今、当時の光景を目のあたり思い浮かべることができるであろう。翌年春新築の本校舎に移ったが、大学は学年進行の建設途上にあつたので、逐次拡充整備されつつあつたものの、諸君はいつも建設過程の雑然としたしかも騒然たる環境の中で、絶えず不備、不便を余儀なくされつつ、勉学に動しんで進学してきた。しかし諸君は、第一期生であるという自覚からフロンティア精神に燃え、よく困難に打克つて、逞しい学徒になって、卒業の日を迎えることになった。

諸君は医学の専門知識を学び、進学するにつれて、医学が如何に広汎多岐に亘り、深遠な学問であるかを知った。そして卒業せんとする今、大学で学び得たものは、ほんの基礎的知識に過ぎないことを覚り、医人たらんには、卒業後の研修、勉学こそ如何に重要であるかを、あらためて認識したことと思う。しかも現代医学は日々に進歩発展し、医療技術もまた発達し、開発されている。それ故優れた医人となるためには、諸君は生涯研修し、勉学を続けなければならないであろう。今日医師の生涯教育が強く要求されているのはこの所以である。

医学は人間の生命現象を対象とする学問であることは申すまでもないが、究極はその実践によって社会の人々の身体と精神の健康を保持増進し、福祉に寄与貢献することが目的であり、使命である。従って諸君は、深い医学の専門的知識と高度に発達した技術を体得して、医療の実践によって、社会福祉に奉仕すべきであることは勿論であるが、同時に対象はいつも人間であるから、医の

倫理を弁え、人々から尊敬、信頼される人格者でなければならない。

現代医学は、著しく専門分化し、医療技術は高度な発達を遂げ、それと自然科学的方法論の導入による計量化が顕著になってきたのがその特徴である。殊にコンピューターの導入は医学の進歩とその精密度に多大の効果をもたらしつつある。しかし、専門の細分化と精巧な医療技術の発達、医学の特性であるべき総合を見失う方向に走り、医療に携わる医師の関心は病氣そのものに集中し、それに悩む病人を疎外する傾向にあることは否定できない。医療の根本理念は、不幸な病人を病から救い、健康福祉に導くことにあるのであって、医療技術は病人の生命を危くする病因を排除するための手段なのである。将来諸君は医師として医療を実践するに当たっては、諸君と対坐しているのは、病氣ではなく病人であることをいつも忘れてはならないと思う。

16世紀フランスの偉大な外科医アンブロアズ パレーは、「われ包帯し、神これを癒し給う。」という極めて謙虚な名言を残した。

パレーのこの思想は、既に紀元前400年医聖ヒポクラテスが医術を施すに当って、常に自然治癒力を重んじた思想と一致している。ヒポクラテスは医師としての誓の中で「凡そ患者に対する処置は、唯患者の必要と利益のためにのみし、苟も危害を招くが如き処置は戒めて、これを避くべきこと。……」と述べている。人間が自然界における一生命体である限り、疾病の治癒あるいは修復は、その人間がもっている生命力に依るものであることは、世紀は移り、医学、医術が如何に進歩発展しようとも、不変の真理であると云えよう。更に近代の偉大な医人アルベルト シュワイツァーは、その生涯を瘴癘の地アフリカにおける医療救済に捧げたが、その過程で悟り得たのは、人間の生命への畏敬であった。これは医の哲理であって、遠くヒポクラテスやパレーの思想に通じている。

諸君は大学卒業後、やがて自ら選んだ専門分野で修業することになるであろうが、臨床医であろうと、あるいは医学研究者であろうと、対象が直接、間接に人間の生命現象にかかわることには、かわりはない。それ故にどの分野を専攻しようとも、生命への畏敬の哲理が信条でなければならない。

諸君は今、大学卒業後、生涯専攻すべき専門分野を決

(14ページに続く)



卒業生の諸君へ

小野寺 壮 吉

学年担当となってこの2年間、1期生諸君と公私にわたって接触する機会が多かった。これから先は学年担当のときのように、学生諸君をかなり深く観察し、学習の到達度をはかり、個別に話し合うようなことは暫くないものと思われるし、まことに貴重な経験を重ねることができたことを喜ばしく思っている（まじめにつとめると、大変時間のとられる仕事で、そう度々はやってられない）。

開学前の昭和47年秋から、一部の教官とともに本学のカリキュラム設定に関係してきた。その仕上げをしなければならぬという気持ちから、1期生の最終段階の学年担当をさせてもらうことになった。学生諸君には、「命ぜられたのではなく、志願してなったのだから少々うるさいかもしれない。」などとも言ひ、大分煙たがられたのではあるまいか。

卒業生諸君は、1期生であるために余計な苦勞を重ねた。同情は惜しまなかったつもりである。5年5か月で卒業の運びになったのは、近年あまり耳にしないことであるが、戦時中にもっとひどいこともあった。医学部4年のところを3年で卒業したこともあったし、医学専門部のあるクラスは3年で仮卒業したという記憶もある。6年分を5年半で済ませることができたのも運命のいたずらであって、あるいは幸運といえるものかも知れない。総合的な力に差はないものと信じている。それにしても、入学の頃の北門町の仮校舎はいかにもひどかった。あとで、雪の重みに堪えかねてつぶれたと聞いたが、われわれの使用していた頃はそれ程のこととも考えなかった。翌年、現在地に落ちついてからも、食堂はこれから、図書館は仮住まい、臨床の講義が始まっても附属病院は建築中という有様であった。昭和51年4月開院という予定で臨床カリキュラムを組んだのであるから、今はやりの“動機づけ”もなにもあったものではない。臨床実習は、患者数300の状態が始まり、しかもわが国最初の関連教育病院制度がこれに加わった。カリキュラムは学年進行にあわせて逐次実施されてきたのであるが、新しい試みには、やってみないと分らないところがあるものである。実際に、本学のカリキュラムは、1期、2期生に実施して、その後逐次手直しが行われてきている。1期生にとっては試行の連続であって、これもある意味では大そう気の毒なことであった。教官の立場からいっても、人は揃わない、実習設備は整わない、カリキュラムは毎年のように手直しされるという有様である。既設の大学とは

異なり、先の見通しのおぼろであったことは、1期生諸君の最大の苦勞の種であつたに違いない。教官の方も、先のことはなかなか見当つけにくく、学生によく説明するどころの話ではなかつた。

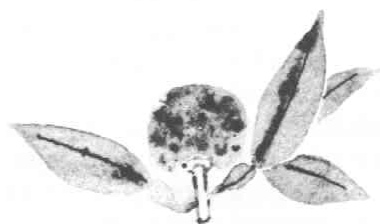
こういったハンディキャップを背負つてることについては、教官も随分気をつかつた。仮校舎以来の“仲間意識”というものもあつて、1期生には関心が深いのであるが、その結果、一部の人に甘えが出てきたように思われるのは、顧みて残念に思つている。世の中に出るとすぐ気付くことであるが、学生時代のようには行かない。お説教もないかわりに、面倒もみてくれないのである。自分の周りだけでなく、日本中を眺めて生きていつてもらいたい。

学年担当としていつも思つていたことは、学生諸君に強くなつてもらいたいということである。医師は一般に慎重で、どちらかといえば良い意味で保守的な人が多い。先輩と後輩のつながりも強いものである。1期生には先輩がいない。常に前途をきり開いて行かなければならない。そのためには、先ず、他の医学部出身者に伍してひけをとらないだけの学力と、先輩・同僚の助言をすなおに受け入れる謙虚さが必要である。いずれが乏しくても、医師としての適性に欠ける。

諸君は、仮校舎以来、大学の建設の進行を眺めながら、将来に希望を託して不便に堪えてきたのであるが、第1期工事の完成後間もなく卒業して大学を去ることになった。しかし、かなりの数の人は、引き続き母校にとどまって勉学を続けることになるものと思われる。諸君は、旭川医科大学の校風の下地を作つてきた筈であるし、同窓のリーダーとなるべく運命づけられている。大いに実力をのばして、活躍してもらいたい。

Commencement Ceremony は、終りの式でなく、社会に巣立つ式である。初心を忘れずに大成することを祈る次第である。

(第6学年学年担当、内科学第一講座 教授)



クラブ活動を振り返って

沖 潤 一



「6年間を振り返って」との依頼でしたが、なにせ入学以来「三角大福」と4人もめまぐるしく総理大臣が変わり、下宿代・授業料なども4～5倍になってしまった今、当時の事を思い出すのは、卒業試験と同じぐらい頭の痛いこと

でした。学問的なことは、もう1人の執筆者の秋山君にお任せすることとし、私はクラブその他のことに触れてみたいと思います。周知の如く、廊下や体育館に吹き溜りのできる北門町の仮校舎に、我々ひ弱な1期生が入学してきたのですが、このような環境にもめげず、学生数と同じ数に近いクラブが、できてしまいました。体育館のガラスを割るのが活動の中心をなしていた野球部。天井裏に上がったボールを捜すのに時間を費した庭球部。針金の輪に雑布をぶら下げただけのゴールをもつバスケット部。雪かきのおじさんと張り合ってた真白になっていたスキー部。定期的に例会を開いていた棧敷文の会の前身。等々。唯一のまともな設備があった卓球部に1番人気があったのは、当然の成り行きでした。従ってその予算配分をめぐる真剣な討論といったら、椅子の数ばかり目立つ現在の総会の比ではありません。1日5時間と、小学校上級生並みの講義スケジュールがあったにもかかわらず、連日夜を徹しての話し合いが、ほぼ全員で続けられました。そうこうするうちに、初めての春を迎え、現在の校舎に移り、若々しい2期生が入学してきました。同時に、各クラブともめきめきと実力をつけ、一時、旭川体育医科大学かときさやかれたものです。中でも昭和30年代の男の子が多いバレー部の活躍は目を見張るものがあり、2回目の出場で東医体準優勝などは、並の新設大学ができることではありません。

私の属していたテニス部も、恐れを知らない者ばかりなので、練習を始めて3か月も経たないうちに、全国学生王座選手権などに参加するようになりましたが、なにせ大学の周囲は文字通りの荒野で、10km離れた近文市民コートしか練習する場所はありませんでした。日の短い旭川ですから、到着したら日没、ということが多々ありましたが、それにもめげず、近くのボンムという喫茶店の励ましもあり、真暗闇の中、雪の降る中練習を続けたものです。その成果が、ボールが見えなくなった夕暮時や、雨や風の日の試合に信じられないような力を発揮する旭川医大と評判になりました。(ごく内輪で、ですが。)

現在でこそ、野球場、サッカーラグビー場、体育館、テニスコートと、一応の設備は整っていますが、使用する人数も雪だるま式に増加し、練習場の確保で、各キ

ャプテンが頭を痛めなければいけないのは、今も昔も変わらないようです。確かに現在はどのクラブも人数が揃い、実力も以前の比ではありませんが、昔のような勢いに欠けるような気がするの、現役を去ったものの杞憂でしょうか……。

文化系のクラブでは、積極的に各町村でフィールドワークを行ないながら、医療問題と取り組んでいた医療研究会。棧敷文の会も、結成して間もないうちから、同人誌を次々と発行し、我々を驚かせたものです。

ただ、当初より文の会の理論的な柱となって活躍していた村上君が、遠く沖縄の海で亡くなられたことは、残念としか言いようがありません。また、ボディビル部でひたすら訓練を重ねていた星君、マイクロコンピュータに興味を持っていた茜谷君が、重い病気で亡くなり、共に卒業式を迎えられませんでした。改めて、お悔み申し上げます。……

以上拙ない文でしたが、昔の様子を知っていただければ、幸いと思います。このように、先輩もなく何も知らない1期生が作った基盤は、後輩の皆さんが、どんどん打ち壊して行って、よりすばらしいものとするよう期待しております。

最後に、私が途中で止めざるを得なかったものとして、旭川医大の校旗、シンボルマーク作製があります。6年間経って、未だその完成を見ないということは、寂しいことです。できるだけ早く、シンボルマークができるようお願いします。

(第6学年 学生)

思い出すままに

秋 山 建 児



先日、ふとなつかしくなつて、北門町にある旧校舎(昭和48年に入学して、1年生として半年近くをすごした校舎)をたずねたところ、跡形もなくなっているのに驚いた。聞けば、ぼくたちが出たあとに幼稚園の校舎として使用して

いたが、雪の重みで屋根が潰れてしまい、危険なので、とりこわしてしまったのだという。何か心ざびしい思いがした。たしかに粗末な古い校舎ではあったけれども、ぼくたちの心の原点とでもいえるような、愛着を感じさせる校舎であった。

6年前国立3期という変則的入試が、10月におこなわれ、11月開校というあわただしさの中で旭川医大の第一歩が始まった。初めて知る旭川の冬の寒さの中、すきま風のはいる教室で、寒さにふるえながらオーバーを着て授業を聴いていたことを思い出す。入学当時はまだ何もわからず、生まれつきのスロースターターで、新しい

環境への適応力に欠けるばかりは、難しい授業についていくのがやっとで、とまどうことが多かったが、あたかも堰を切った水が勢いよく流れてゆくかのように、クラブ活動や、学生会の設立などに自主的にとりこんでいく友人たちをみて、自分は本当にみんなについていけるのであろうかと、内心おおいに不安を抱いたものであった。

あれから6年が過ぎてもう卒業の年を迎えようとしている。いろんな事があった。楽しいことも、哀しいことも、にがい失敗も数限りなくある。それらの一つ一つは、あるいは私自身の歴史の頁の中にそっとしまっておけばいいことなのかもしれない。しかし多くの人とのお会いのなかで、ささえられ励まされることの多かった自分をふりかえてみるのもまた意義のあることであろう。

2年生の後半から始まった解剖学実習によって、解剖学と教育熱心な先生方に心ひかれたばかりは、いつのまにか解剖学第1講座に出入りさせていただくようになった。特に何かを研究するという事はなかったが、3回生の解剖学実習のとき、再びいっしょに御遺体を解剖させていただいたことを深く感謝している。また若くして逝かれた兼重達男先生の誠実な人柄に、そして冬の寒さなかに後輩の実習のために旭川にこられて指導された浦良治先生のかざらない人柄に接し、深く感銘をうけたことを覚えている。そしてぼくたちの解剖学実習が、献体された方々の尊い御遺志や、白菊会の熱心な活動、また仲西先生を始めとするスタッフの方々の献身的な努力によって支えられていることを知り、あらためて深く感謝せずにはいられなかった。

やがて臨床の講義が始まるようになった頃、免疫学に興味をもつようになり、授業が終わったあととか、休みなどを利用して、病理学第2講座に出入りさせていただくようになった。正直な話、講座で研究されているテーマは難しくてぼくの理解力をはるかに超えており、実験を手伝うというよりは、失敗して足をひっぱるという方が多かったけれど、温かく指導していただいたことを深く感謝している。実験動物のかわいいマウスたちと友達になれたのも楽しい思い出である。先生方の毎日を見ていると、研究というものが決してはなやかなものでなく、日々の地道な実験の積み重ねであると感じたものであった。

また第1回と第2回の大学祭において多くの友人と協力して医学展をひらくことができた。学生の段階でどこまで医学を語り得るかという大きな不安はあったが、さいわいなことに多くの先生方の御指導をえて、市民の人たちと広く触れる機会がもてたことは貴重な経験であった。

こうして6年をふりかえてみると、学業半ばにして、あまりにも早く逝ってしまった星君、村上君、茜谷君のことが思い出される。3人もみなそれぞれに、何かをいっしょうけんめいにやろうとしていた学友であった。生と死が、これから何度も直面していかなばならない現実であることは頭の中でわかっていても、きのうま

で机を並べていた学友が、今日はその姿を見ることができないことは、言葉では表現することのできない深い哀しみである。心から御冥福を祈りたい。

卒業したといっても、未熟な点が多くなることは、自分が一番よく知っている。一人前になるには数多くの経験や失敗をつみかさねていくのだと思う。1期生として、大学や社会に貢献できるようになるには、まだ多くの時間がかかるのだろうが、あせらずにやっていきたいと思っている。

(第6学年 学生)

6年間の思い出

安江悠子



あつという間の6年間と云ってしまうことはできない年月でした。何しろ「番茶も出花」がお肌も曲ろうかという年になったのですから……。旭川に住み始めて1か月もたたないうちに、雪が降り始め、寒くなってくるし、本当に暮

していけるのかしら一、と心細く思った日は遠く、今では北国の生活にどっぷりと慣れ親しんでいる自分に気付いたりしています。ここまで来るのにずい分と色々な人にお世話になりました。幸い周囲にいい人に恵まれ、おちょこちよいの私がケガもせずに、大きな壁にもぶつからず来られたこと、多くの人にお礼を申し上げたい心境です。それに加えて北国の四季それぞれの風景は何にも増して忘れ難い事々です。水芭蕉の群落、カタクリの花の大群落、6月のライラック、大雪や十勝での高山植物の数々、北海道の人にとって当たり前の風景なのでしょうが私などにはすべてが新鮮な驚きでした。クマの肉のお刺身を食べた事など全く自慢に思っている位ですから一。(こんな風ですと、あまりにも観光的で、ミーハー人間なる事を暴露しているのでしょうか……。)

そして現実に戻って見る時、とにかく私達女性はその数があまりにも少い為か、こちらのPR不足の為か、色々とその存在を無視され、おかげで(?)強たくましくなったような気がしています。逆に云えば何だかオロオロしている中で、色々な先生方に相談しているうちに、本当に頼れる先生に巡りあえた事が、この6年間で一番の収穫だったと思えるのですが、ただ、私達が一期生として後に続く女子学生の方の為にという自覚を持って、道を開いてきたと云える事が何かあったかしらと考えると、ただ反省を残すのみです。あまりにも、そういう意味では余裕のない、とにかくすべてが最初という事で追われることばかりの日々であったという事も良きにつけ悪きにつけふり返らざるを得ません。そして、その挙句に到達した事と云えば、何かあれば積極的に多くの先生方の門戸を叩いてみれば一、という事です。そんな当た

り前の事が、案外弱気な私にとっては、一大決心のように大変な事でしたが、やはり叩いてみてよかったと思える事の方が多かったようです。

ただ1つ、これは私達女生徒が、本当に「痛み」として泣いた事。うわさです。それが根も葉もあったとしてもなかったとしても、あまりにも狭い閉鎖社会の中で（特に最初の頃）尾ひれがつけて流された情報は陰さんそのものであったと思います。長ずるにつれ顔の皮もすっかり厚くなり平気にもなりましたが、やはり痛かったし、今でも痛く残っています。お互いが手さぐりで色々とした手がたまたま傷ついたからと云って、許さないなん

で云ってはいられませんが、傷をいたわる優しさがほしかったというのはあまりにもわがままなのでしょう。

泣いて笑った6年間。大学では、過保護に育てられたのかも……。でもそのおかげでrichな教えを受けたと誇れもしますし、逆に目先の事にふり回されすぎたとも云えます。でもそのすべてをacceptして、やっぱり、いい学生生活を送れる事ができたと思います。本当に色々とお世話になった方々に、心よりのお礼の言葉をそえて、結びとしたいと思います。本当にどうも長い間お世話になりました」と。

（第6学年 女子学生代表）



昭和 45 年

7月10日 第3期北海道総合開発計画が閣議で決定された。(道北、道東に国立医科大学設置が折り込まれた。)

昭和 46 年

6月28日 国立医大誘致旭川市民会議による「国立医大誘致を熱望する市民の集い」が開催され、席上、旭川大学設立期成会に対し、これまでに集められた署名14万余名の署名簿及び157団体からの道知事宛の要請書が提出された。

8月20日 道知事は、北海道に誘致する国立医科大学の誘致場所を旭川市に決定した。

9月1日 「旭川大学設立期成会」を「国立医科大学旭川誘致期成会」に名称変更した。

10月2日 全国自治体病院協議会北海道地方会議において、国立医科大学の旭川市設置実現促進を決議した。

10月19日 文部大臣の諮問機関である医科大学（医学部）設置調査会（座長、黒川利雄財団法人癌研究会附属病院院長）は、医科大学（医学部）新設について、大要次のとおり考え方をまとめた。

1. 道県に医科大学のないところを重点とする。ただし北海道は広域であるので別とする。
2. 地域医療に貢献度の高いところとする。
3. 医療過疎を解消するために必要なところとする。
4. 2つ以上の大学が応援するところであること。

11月17日 国立医科大学北海道誘致期成会及び国立医科大学旭川誘致期成会が、次の内容について、文部省から事情を聴取された。

1. 北海道大学との連携の問題
2. 建設予定候補地の内容とニュータウンの造成内容
3. 基盤整備（道路、上・下水道、電気等）
4. 住宅問題
5. 看護婦対策
6. 公的医療機関の概要
7. 仮校舎
8. 解剖用遺体確保の見通し
9. 医療圏
10. 教授スタッフの問題

12月7日 医科大学（医学部）設置調査会が、「医師養成の拡充について」と題する報告を文部大臣

に行い、「医師養成の拡充は国家的急務である」旨を述べる。

昭和 47 年

- 1月11日 昭和47年度予算の復活折衝後、文部大臣が大蔵省で記者会見し、北海道、山形、愛媛の3校に創設準備費が盛られた旨、発表した。
- 5月1日 文部事務次官から北海道大学長宛に、「旭川市に国立医科大学を創設するため準備事務の委嘱」があり、北海道大学が国立医科大学の創設準備にあたることになった。
- 5月12日 北海道大学に、旭川医科大学設置に関する重要事項を審議するため、「旭川医科大学設置準備委員会」を設置した。
同日、学長予定者として北海道大学名誉教授山田守英氏、医学進学課程責任者予定者として北海道大学助教授（文学部）笹森秀雄氏を文部省に推薦することに決めた。
- 5月15日 医科大学（医学部）の関連教育病院の基本問題に関する調査研究を行うため、文部省に「関連教育病院調査研究会」（座長、懸田克躬順天堂大学長）が設置され、第1回会合が開催された。
- 5月31日 文部省大学設置審議会大学設置分科会において、大学附属病院の必要病床数のうち、600床を超える部分については、学生の教育に十分使用可能な関連教育病院の病床数をもって充てることができるようになった。
- 6月22日 旭川、山形及び愛媛の各医科大学（医学部）の設置に必要な施設設備等、創設準備段階における具体的な諸問題を協議するため、文部省に「医科大学（医学部）設置準備会」が置かれた。
- 6月26日 旭川医科大学附属病院長予定者として、福島県立医科大学教授黒田一秀氏を文部省に推薦することに決めた。
- 6月26日 北海道大学で「医科大学（旭川）創設準備室設置に関する臨時措置規程」が制定された。
- 7月1日 北海道大学に「旭川医科大学創設準備室」が設置された。
準備室長（学長予定者）山田守英
準備室勤務（進学課程責任者予定者）笹森秀雄
準備室事務長 山本義和
準備室庶務掛長 竹島誉俊
準備室庶務掛（文部省併任） 寺山稜
なお道職員3名、旭川市職員2名が準備室出向を命じられた。
- 7月26日 旭川医科大学系統解剖用遺体確保のための打ち合わせが、北海道大学及び札幌医科大学の

関係者を集めて行われた。

- 7月27日 「関連教育病院調査研究会」が文部大臣に中間報告を行った。
- 8月17日 旭川、稚内、留萌、芦別、紋別、士別、名寄、深川、富良野9市長で構成する道北市長会が留萌市において開催され、席上、山田準備室長から系統解剖用遺体の確保について協力要請が行われた。
- 8月29日 旭川医科大学の施設、設備の整備充実に協力するため「財団法人国立旭川医科大学設置協力会」の設立総会が行われた。
- 10月4日 「財団法人国立旭川医科大学設置協力会」（会長 広瀬経一北海道商工会議所連合会会頭）の設立が認可され、これ以後、医科大学開校のために必要な、図書、機械、器具、関連教育病院整備、仮校舎整備等15億円を超える整備作業が進められた。
- 10月13日 文部省大学設置審議会に対し、「旭川医科大学設置に係る予備審査書類」を提出した。
- 11月24日 旭川医科大学仮校舎として北海道教育大学教育学部附属旭川小学校旧校舎（旭川市北門町9丁目）を使用することにつき北海道教育大学長から承認を受けた。
- 11月25日 文部省大学設置審議会の予備審査現地調査が行われた。

昭和 48 年

- 1月22日 文部省大学設置審議会に対し、「旭川医科大学設置に係る本審査書類（旭川医科大学設置計画書）」を提出した。
- 2月9日 国立学校設置法等の一部を改正する法律案が閣議決定された。
- 2月10日 旭川医科大学仮校舎として使用する北海道教育大学教育学部附属旭川小学校旧校舎の改修工事が終わり、校舎の引き渡しを受けた。
- 2月12日 昭和48年度旭川医科大学入学者試験問題の印刷を発注した。
- 2月21日 文部省大学設置審議会の本審査現地調査が行われた。
- 3月1日 「関連教育病院調査研究会」が文部大臣に対して第1次報告を行った。
- 3月16日 文部省大学設置審議会が、文部大臣に対し、旭川医科大学、山形大学医学部、愛媛大学医学部の昭和48年度設置認可の答申を行った。
- 3月29日 国立学校設置法等の一部を改正する法律案が国会に提出された。
- 4月1日 旭川医科大学創設準備室が、北海道大学から旭川医科大学仮校舎に移転した。
- 4月9日 道立旭川高等看護学院が開校した。

- 4月11日 昭和48年度予算が成立した。
- 5月7日 旭川医科大学新営工事起工式が、建設予定地である旭川市神楽町神楽岡3番地11において挙行された。



- 9月25日 国立学校設置法の一部を改正する法律(昭和48年法律第103号)が成立した。
- 9月29日 旭川医科大学が開学した。
開学当初のスタッフは次のとおりである。
学長 山田守英
学生部長事務取扱(併任)教授 黒田一秀
附属図書館長事務取扱(併任)教授小野寺社吉
事務局長 前田清一
その他教官29名、事務系職員27名、計60人



- 9月29日 旭川医科大学学則を制定した。
- 9月29日 「国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令の一部を改正する省令(昭和48年文部省令第20号)」の公布、施行により旭川医科大学に次の講座・学科目が開設された。
(講座)解剖学第一、生理学第一、生化学、病理学第一、細菌学、内科学第一、外科学第一、泌尿器科学(8講座)
(学科目)哲学、歴史、心理学、社会学、物理学、化学、生物学、英語、ドイツ語(9学科目)
- 9月29日 市立旭川病院の一部を、旭川医科大学暫定施設(講座の研究室)として使用することとなった。

- 10月1日 入学願書受け付けを開始した。(～10月9日)
- 10月17日 第1回教授会が開催された。
- 10月21日 昭和48年度入学選抜試験を、旭川工業高等専門学校、北海道旭川東高等学校、北海道旭川西高等学校を会場に実施した。(定員100名に対し志願者は1,620名であった。)
- 10月22日 昭和48年度入学選抜試験合格者101名を発表した。
- 10月29日 第1回入学式を仮校舎講堂において挙行した。入学者100名(道内出身者46名、道外出身者54名)



- 11月5日 旭川医科大学校友会が成立した。
- 11月6日 授業が開始された。



- 11月20日 「旭川医科大学開学記念祝典」が、ニュー北海ホテルにおいて挙行された。
- 11月23日 「旭川医科大学の開学を祝う市民の集い」が道北経済センターにおいて開催された。
- 12月6日 北海道白菊会員23名が、旭川医科大学に献体名簿を提出した。
- 12月13日 国立大学協会第53回総会において、旭川医科大学の国立大学協会入会が認められた。
- 12月21日 第1学年ティーパーティーを仮校舎合同講義室において実施した。

昭和49年

- 2月12日 第1回旭川医科大学談話会が開催された。
- 2月28日 旭川医科大学と旭川市との間で、市立旭川病

院を旭川医科大学暫定施設として使用すること、及び市立旭川病院が、旭川医科大学の臨床医学教育に協力すること（いわゆる関連教育病院）の協定書を締結した。

- 3月20日 講義実習棟（SR4 6,689㎡）及び中央研究棟（R3 1,461㎡）が竣工した。
- 3月23日 昭和49年度入学者選抜試験を、旭川工業高等専門学校及び北海道旭川東高等学校を会場に
- 3月24日 実施した。（定員100名に対し志願者は1,383名であった。）
- 3月30日 昭和49年度入学者選抜試験合格者101名を発表した。
- 4月1日 「国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令の一部を改正する省令（昭和49年文部省令第7号）」の公布、施行により、次の講座、学科目が増設された。
（講座）解剖学第二、生理学第二、薬理学、病理学第二、内科学第二、小児科学、産婦人科学
（学科目）数学
- 4月20日 第2回入学式を仮校舎講堂において挙行了。入学者101名（道内出身者75名、道外出身者26名）
- 5月9日 校舎の一部完成に伴い、仮校舎から、新校舎（旭川市神楽町神楽岡3番地11）に移転した。また、暫定施設からも一部新校舎へ移転した。
- 5月13日 新校舎で授業を開始した。



- 6月7日 「国立学校設置法施行規則の一部を改正する省令（昭和49年文部省令第21号）」の公布、施行により、旭川医科大学に、学長を補佐するため副学長2名（教育研究及び厚生補導担当、医療担当）及び大学の運営に関し学外有識者の意見を求めるため参与若干名が置かれることとなった。また、学生部が廃止され、事務局が学生の厚生補導に関する事務を併せて処理することになった。
- 7月6日 第21回北海道地区大学体育大会が、室蘭工業大学を当番校として開催され、陸上競技（男・女）、準硬式野球、バレーボール、卓球の各種
- 7月8日

目に40名が参加した。（男子の部参加30校中23位、女子23校中14位）



- 8月8日 地域関係者を集めて、新校舎披露パーティーを催した。
 - 8月22日 昭和49年度学生団体は次のとおりである。
- | | 体育系団体 | 文化系団体 | 計 |
|-------|-------|-------|-----|
| 団体数 | 20 | 5 | 25 |
| 加入学生数 | 258 | 54 | 312 |
- 8月31日 体育館（S1 1,082㎡）及び福利厚生施設（R2 1,848㎡）が竣工した。
 - 9月1日 学生及び職員に対して、学生の厚生補導に関する諸問題及び大学の方針等を周知させ、相互理解に資するため、広報誌「かぐらおか」第1号を発行した。
 - 10月16日 教育研究及び厚生補導担当の副学長に下田晶久氏（病理学第一講座教授）、医療担当副学長に黒田一秀氏（泌尿器科学講座教授）が発令された。
 - 11月1日 附属図書館長に小野寺吉吉氏（内科学第一講座教授）が発令された。

昭和50年

- 1月18日 第1学年のスキー授業が伊の沢スキー場において行われた。（第2学年のスキー授業は、2月22日から開始された。）



- 2月10日 学生、教職員を対象とした全学スポーツ大会が開催された。実施種目は、卓球、バスケッ
- 3月15日 トボール、バドミントン、バレーボールであ

った。

- 2月20日 参与として次の5名が発令された。
 黒川利雄（財団法人癌研究会附属病院名誉院長）
 丹羽貴知蔵（北海道大学長）
 日野原重明（聖路加看護大学長）
 広瀬経一（財団法人国立旭川医科大学設置協力会会長）

盛永要（旭川商工会議所会頭）

- 3月6日 第1学年、第2学年学生を対象に課外教育（スキー遠足）が、十勝岳スキー場において実施された。

- 3月23日 昭和50年度入学者選抜試験を、旭川医科大学及び北海道旭川東高等学校を会場に実施した。

- 3月24日 （定員100名に対し、志願者は1,476名であった。）

- 3月29日 昭和50年度入学者選抜試験合格者 100名を発表した。

- 4月1日 「国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科科目に関する省令等の一部を改正する省令（昭和50年文部省令第16号）」の施行により、次の講座が増設された。

衛生学、公衆衛生学、寄生虫学、法医学、外科学第二、整形外科、眼科学

- 4月1日 「国立学校設置法施行規則等の一部を改正する省令（昭和50年文部省令第8号）」の公布、施行により、旭川医科大学に附属病院創設準備室が設置された。また、附属図書館事務室が廃止され、事務局が附属図書館事務を併せて処理することになった。これにより、大学の事務は事務局に一元化された。

- 4月16日 学年担当制度が発足した。

- 4月18日 第3回入学式を体育館において挙行了。入学者100名（道内出身者76名、道外出身者24名）

- 6月2日 昭和50年度学生団体は次のとおりである。

	体育系団体	文化系団体	計
団体数	21	11	32
加入学生数	313	129	442

- 6月28日 本部管理棟（R2、1,281㎡）が竣工した。

- 7月12日 白菊会旭川医科大学支部が発足した。

- 7月12日 第22回北海道地区大学体育大会が、北海道大学を当番校として開催され、陸上競技、準硬式野球、バスケットボール、バレーボール、サッカー、卓球、バドミントン、剣道、弓道の各種目に84名が参加した。（男子の部参加24校中9位、準硬式野球2回戦進出、バレーボール準々決勝進出）

- 7月14日 第18回東日本医科学生総合体育大会夏季大会が、信州大学医学部を主管校として開催され、陸上競技、準硬式野球、硬式庭球、バスケッ

- 7月20日 第18回東日本医科学生総合体育大会夏季大会が、信州大学医学部を主管校として開催され、陸上競技、準硬式野球、硬式庭球、バスケッ

- 7月31日 陸上競技、準硬式野球、硬式庭球、バスケッ

トボール、バレーボール、卓球、剣道、弓道、バドミントン（男・女）の各種目に104名が参加した。（32校中27位、円盤投 新ヶ江正4位、バドミントン（女子）5位）



- 7月30日 基礎臨床研究棟（SR8、9,890㎡）が竣工し、市立旭川病院内の暫定施設からの移転が終了した。

- 8月8日 旭川医科大学学生の臨床医学教育を市立旭川病院で行うことに関する事項を審議するため、「旭川医科大学関連教育病院運営協議会」が発足した。

- 9月4日 R・I研究施設（R2、939㎡）及び動物実験施設（R3、1,172㎡）が竣工した。

- 9月24日 「創設から創造へ」をテーマに第1回医大祭が行われた。（大学祭実行委員会委員長 磯

- 9月28日 辺雄二）



- 10月12日 第18回東日本医科学生総合体育大会冬季大会が、北海道大学医学部を主管校として開催され、スキー（男子）に12名が参加した。

- 3月31日



11月7日 昭和50年度解剖体追悼法要が、東本願寺旭川別院において挙行された。

昭和51年

2月12日 第2回全学スポーツ大会が、バレーボール、
 } バスケットボール、バドミントン、卓球の各
 2月28日 種目にわたり開催された。

2月14日 第1学年学生を対象として、キトウシスキー
 場でスキー遠足を実施した。

3月23日 昭和51年度入学者選抜試験を、旭川医科大学
 } 及び北海道旭川東高等学校を会場に実施した。

3月24日 (定員100名に対し志願者は3,088名であった。)

3月25日 納骨堂(旭川市近文6線1号近文墓地)及び
 陸上競技場(14,442㎡、400mトラック、サッ
 カー場、ラグビー場各1面)が竣工した。

3月31日 昭和51年度入学者選抜試験合格者100名を發
 表した。

4月1日 「国立大学の学科及び課程並びに講座及び学
 科科目に関する省令の一部を改正する省令(昭
 和51年文部省令第13号)」の公布・施行によ
 り、次の講座が増設された。

内科学第三、精神医学、皮膚科学、耳鼻咽喉
 科学、放射線医学

4月16日 第4回入学式を体育館において挙行した。入
 学者100名(道内出身者65名、道外出身者35
 名)

4月30日 昭和51年度学生団体は次のとおりである。

	体育系団体	文化系団体	計
団体数	22	19	41
加入学生数	368	248	616

5月10日 「国立学校設置法施行規則の一部を改正する
 省令(昭和51年文部省令第18号)」の公布、施
 行により、医学部附属病院が設置され、附属
 病院創設準備室は廃止された。

附属病院の組織は次のとおりである。

診療科 第一内科、第二内科、精神科神経科、
 小児科、第一外科、第二外科、整形
 外科、皮膚科、泌尿器科、眼科、耳
 鼻咽喉科、産科婦人科、放射線科、
 麻酔科、歯科口腔外科(15診療科)

検査部

手術部

放射線部

材料部

薬剤部

看護部

病床数 320床(予算病床)

5月28日 臨床講義棟(R1、1,444㎡)及び中央機械
 室増築分(R2、390㎡)が竣工した。

6月15日 納骨堂入魂式を挙行した。



6月17日 「躍動一解き放て、若き力を！」をテーマに
 } 第2回医大祭が行われた。(大学祭実行委員
 会委員長 中村克己)

6月20日

7月10日 第23回北海道地区大学体育大会が、帯広畜産
 } 大学を当番校として開催され、陸上競技(男、
 7月12日 女)、準硬式野球、バスケットボール、バレー
 ボール、サッカー、卓球(男・女)、バドミン
 トン、剣道、弓道の各種目に104名が参加し
 した。(男子の部参加30校中10位、円盤投新ヶ
 江正4位、バレーボール優勝、サッカー3回
 戦進出)

7月20日 第19回東日本医科学学生総合体育大会夏季大会
 } が、慶應義塾大学医学部を主管校として開催
 7月31日 され、陸上競技、準硬式野球、硬式庭球(男・
 女)、サッカー、バスケットボール、バレー
 ボール、卓球(男・女)、柔道、剣道、空手
 道、弓道、バドミンントンの各種目に160名が
 参加した。(33校中24位、バレーボール2位)

8月2日 第10回全日本医科学学生体育大会王座決定戦が
 } 関西医科大学を責任校として開催され、バレー
 10月11日 ボール部門で3位となる。

8月7日 参与盛永要氏死去

9月10日 「旭川医科大学医師会」が発足した。

9月22日 昭和51年度解剖体追悼法要を、東本願寺旭川
 } 別院において挙行した。

9月22日 医学部附属病院(SR12-1、37,037㎡)が
 } 竣工した。

9月25日 第1回運動会が行われた。



- 10月1日 医学部附属病院患者等の福利厚生のため、「財団法人旭仁会」が設立された。
- 10月22日 医学部附属病院前を起点とし、緑が丘ニュータウンを縦断する民営バス1系統の運行が開始された。
- 10月26日 「旭川医科大学附属病院開院記念祝典」を挙



- 行した。
- 11月1日 医学部附属病院を開院し、診療を開始した。
(实在病床 327床)
- 11月5日 第19回東日本医科学生総合体育大会冬季大会
{
3月25日 が、岩手医科大学を主管校として開催され、ラグビー、スキーの各種目に43名が参加した。
- 11月15日 医学部附属病院入院患者受入れを開始した。

昭和52年

- 1月17日 医学部附属病院初産児命名式を行った。(枝幸町梅津和夫、静子御夫妻長女「玲子」ちゃん、命名者山田守英学長)
- 2月14日 第3回全学スポーツ大会が、バドミントン、卓球、サッカーの各種目にわたり開催された。
{
3月4日
- 2月19日 第1学年学生を対象として、キトウシスキー場でスキー遠足を実施した。
- 2月20日 参与として次の4名が発令された。黒川利雄、丹羽貴知蔵、日原重明、今井道雄(財団法人国立旭川医科大学設置協力会会長)
- 3月23日 昭和52年度入学者選抜試験を、旭川医科大学及び北海道旭川東高等学校を会場に実施した。
{
3月24日 (定員100名に対し志願者は2,685名であった。)
- 3月30日 昭和52年度入学者選抜試験合格者 101名を発表した。
- 3月31日 野球場(11,668㎡)及びテニスコート(4,512㎡、5面)が竣工した。
- 4月15日 第5回入学式を体育館において挙行政した。入学者 101名(道内出身者75名、道外出身者26名)
- 4月18日 「国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令の一部を改正する省令(昭

和52年文部省令第14号)」の公布、施行及び「国立大学の附属病院等の診療科に関する訓令」の一部改正(昭和52年文部省訓令第12号)の実施により、次の講座、診療科が増設された。

(講座) 生化学第二、脳神経外科学
(診療科) 第三内科、脳神経外科

- 4月29日 昭和52年度新入生合同グループ研修を層雲峡簡易保険保養センターにおいて実施した。
{
5月8日
- 6月16日 「偉大なる実験—失われた個性を求めて」をテーマに第3回医大祭が行われた。(大学祭実行委員会委員長 鈴木安名)
- 6月19日
- 7月5日 昭和52年度学生団体は次のとおりである。

	体育系団体	文化系団体	計
団体数	28	21	49
加入学生数	491	263	754

- 7月9日 第24回北海道地区大学体育大会が、北海道教育大学を当番校として開催され、陸上競技、準硬式野球、バスケットボール、バレーボール、サッカー、卓球(男・女)、バドミントン、柔道、剣道、弓道の各種目に118名が参加した。(男子の部参加28校中11位、円盤投新ヶ江正4位、砲丸投新ヶ江正5位、準硬式野球3位、バレーボール3回戦進出)
- 7月11日
- 7月30日 第20回東日本医科学生総合体育大会夏季大会が、福島県立医科大学を主管校として開催され、陸上競技、準硬式野球、硬式庭球(男・女)、サッカー、バスケットボール、バレーボール、卓球、柔道、剣道、空手道、弓道、バドミントンの各種目に174名が参加した。(34校中23位、砲丸投新ヶ江正4位、円盤投稲尾茂則2位、準硬式野球4位、バレーボール優勝)
- 9月14日 第2回運動会(体育大会)が行われた。
- 9月22日 昭和52年度解剖体追悼法要を、東本願寺旭川別院において挙行政した。
- 10月10日 第20回東日本医科学生総合体育大会冬季大会が、日本大学医学部を主管校として開催され、ラグビー、スキーの各種目に55名が参加した。
{
4月2日 (34校中21位、ラグビー3回戦進出、女子回転2位佐藤綾子)
- 11月1日 「附属病院開院1周年記念祝会」を、医学部附属病院職員食堂において挙行政した。
- 11月17日 学生課主催第1回映画会を実施した。
- 11月30日 旭川医科大学主催交通安全講習会を実施した。
- 12月7日 学生課主催昭和52年度歩くスキー講習会(第1回目)を実施した。

昭和53年

- 1月9日 第5学年臨床実習が開始された。
- 1月23日 第4回全学スポーツ大会が、サッカー、卓球、
バドミントンの各種目にわたり開催された。
- 2月2日
- 1月31日 附属図書館（R 2 1,737㎡）が竣工した。
- 2月4日 第1学年学生を対象として、キトウシスキー場
でスキー遠足を実施した。
- 3月23日 昭和53年度入学者選抜試験を、旭川医科大学
及び北海道旭川東高等学校を会場に実施した。
- 3月24日 （定員100名に対し志願者は2,379名であった。）
- 3月25日 屋外運動場体育管理施設（R 1 158㎡）が竣工
した。
- 3月30日 昭和53年度入学者選抜試験合格者 101名を登
表した。
- 4月1日 本学住所が「旭川市神楽町神楽岡3番地11」
から、「旭川市西神楽4線5号3番地の11」に
地名変更になった。
- 4月14日 第6回入学式を体育館において挙行了。入
学者101名（道内出身者67名、道外出身者34名）
- 4月15日 附属図書館竣工祝賀会を学内関係者を集めて
挙行了した。
- 4月22日 昭和53年度新入生合同グループ研修を、ホテル
層雲において実施した。
- 4月23日
- 6月7日 昭和53年度サークル活動関係セミナーを第5
講義室において実施した。（13団体参加）
- 6月15日 昭和53年度学生団体は次のとおりである。

	体育系団体	文化系団体	計
団体数	27	20	47
加入学生数	507	250	757

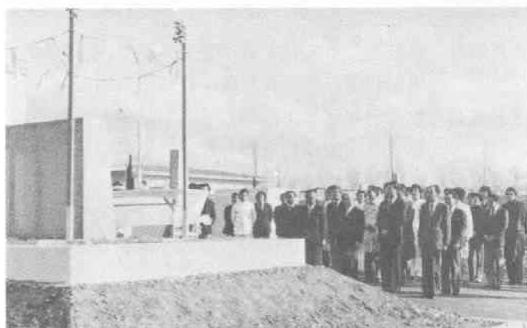
- 6月15日 「翔びたたん、いざ!!—研ぎすまされた力を
携えて—」をテーマに第4回医大祭が行われ
た。（大学祭実行委員会委員長 相馬光宏）
- 7月15日 第25回北海道地区大学体育大会が、北見工業
大学を当番校として開催され、準硬式野球、
バスケットボール、バレーボール、卓球、柔
道、剣道、弓道の各種目に 100名が参加した。
（男子の部参加30校中13位、準硬式野球準決
勝進出、バレーボール準決勝進出）
- 7月20日 第21回東日本医科学生総合体育大会夏季大会
が、日本医科大学を主管校として開催され、
7月31日 陸上競技、準硬式野球、硬式庭球（男・女）、
サッカー、バスケットボール、バレーボール、
卓球（男・女）、柔道、剣道、空手道、弓道、
バドミントン（男・女）の各種目に 205名が
参加した。（34校中17位、円盤投稲尾茂則2
位、走高跳小黒恵司3位、三段跳同2位、準
硬式野球4位、バスケットボール準決勝進出
バレーボール優勝、柔道（重量級）大木康生
3位、空手道5位、弓道（射技優秀賞）高橋

真理子)

- 9月13日 第3回体育大会が行われた。
- 9月18日 職員、学生により構内植樹を実施した。



- 9月20日 昭和53年度解剖体追悼法要を、東本願寺旭川
別院において挙行了した。
- 10月1日 第21回東日本医科学生総合体育大会冬季大会
が、北里大学医学部を主管校として開催され、
3月31日 スキーに30名が参加する予定である。
- 10月21日 医学部附属病院当初計画 600床について厚生
大臣から承認された。
- 10月25日 「附属病院当初計画 600床完成記念祝会」を
学内関係者を集めて挙行了した。
- 11月1日 動物慰霊碑入魂式及び53年度実験動物慰霊祭
を、学内関係者を集めて挙行了した。



- 11月18日 第6学年学生の臨床実習が終了した。

昭和54年

- 1月6日 旭川医科大学と総合病院旭川赤十字病院及び
国立療養所道北病院との間で、両病院が旭川
医科大学の臨床医学教育に協力すること（い
わゆる実習協力病院）の協力書を締結した。
- 1月10日 学生課主催昭和53年度歩くスキー講習会（第
1回目）を実施した。
- 1月13日 昭和54年度大学入学者選抜共通第1次学力試
験を旭川医科大学を会場に実施した。（受験
者 789名）
- 1月14日
- 1月18日 第5回全学スポーツ大会が、サッカー、卓球、

バドミントンの各種目にわたり開催された。

1月25日

1月31日 学生課主催卓球講習会を実施した。



2月7日 第1学年学生を対象として、キトウシスキー場でスキー遠足を実施した。



2月20日 参与として次の4名が発令された。今井道雄、黒川利雄、丹羽貴知蔵、日野原重明。

3月4日 昭和54年度旭川医科大学入学試験を、旭川医科大学を会場に実施した。(定員120名に対し志願者は283名であった。)

3月5日 学生課主催バドミントン講習会を実施した。

3月7日 学生課主催バドミントン講習会を実施した。

3月10日 昭和54年度旭川医科大学入学試験合格者120名を発表した。

3月24日 「旭川医科大学第1回卒業証書授与式」が体育館において挙行された。(庶務課 学生課)

(2ページから続く)

め、将来計画を樹てていることと思う。社会は、新しい医科大学の最初の卒業生である諸君に大きな期待をかけ、注目している。殊に本学が旭川に設置された経緯から、地域社会は将来本学卒業生が地域の医療に当たり医療過疎の解消に寄与することを切に希っている。

大学は諸君が将来優れた医人となるため、本学附属病院を研修の場とし、あるいはやがて設置される大学院に入学して、それぞれ研修あるいは研究に専念することを心から歓迎するものである。

ここに、諸君の卒業を祝し、諸君が旭川医大の第一期卒業生であるという誇りと自信をもって、今後一層真摯な研修と学究に専念されることを希望して止まない。

新任教官紹介

昭和53年9月1日付けで、精神医学講座の宮岸勉教授が助教授から教授に昇任されました。宮岸教授は既に教授として教育、研究に当たられ講座の充実を図られていますが、本誌では御本人から挨拶をいただくとともに、親しい教官である松嶋教授からも御紹介いただくこととしました。新任教官の教育研究方針を理解する一助としてください。(学生課)

就任にあたって

■ 精神医学講座 ■

宮岸 勉

昨年9月、森田前教授の後任を仰せつかりました。昭和51年の講座開設当初は、僅か4人のスタッフで仕事を始めたのですが、現在は9人にふえ、教室体制の基礎づくりは出来たように思います。



さて、精神医学といえば、

その領域の中でも代表的な疾患である精神分裂病、躁鬱病の原因すら詳らかでない現状ですから、一時も拱手傍観は許されないわけで、毎日少しずつでもこの得体の知れない臨床医学の発展可能性を探りたいと願っています。

私自身は脳の老化過程および酸素欠乏状態の際にみられる超微形態学的変化に関心を持ち続けてきましたが、これは老人性精神障害、意識障害の臨床と直結する精神科領域の重要課題といえますので、今後も同じ方向で研究を進めたいと考えています。他に精神疾患の内分泌学的研究、睡眠障害の神経生理学的研究などのグループが活動していますが、要は、スタッフの一人一人が自由な着想でのびのびと研究出来るような雰囲気になった教室であってほしいと思いますし、現在はその意味できわめて順調な歩みを辿っているものと確信しております。

学生時代を振り返ってみますと、不勉強が災いして、精神医学の講義も臨床実習も何となくとつきにくかった記憶があるのみで、精神科医になろうと思うようになった契機がどうもはっきりしません。しかし、卒業18年を経た今では、この仕事はどうやら自分にむいているらしいと思ったりするので、人の心は勝手に判らないものです。(精神医学講座 教授)

宮岸新教授のこと

松嶋 少二

私は、宮岸君とは大学医学部で同級でしたが、基礎医学や臨床の実習などで同じグループに配属されたことはなく、したがって私は彼の学生時代についてあまり多くの知識を持っておりません。しかし彼と私とは種々の意味で非常に対照的な学生生活を送ったのではないかといえるかもしれません。私の記憶や同級生の話と総合する

と、彼は学生時代一回も講義を休んだことはなく、また当時の学生達の間で盛んであったマージャンその他の遊びもまったくせず、90人近くいた同級生の中でも5人のうちに入る模範的な学生であったといえます。卒業して直ちに北大精神医学教室に入り、以後同じ道を着々と歩んでおられます。私が北大第3解剖の助手となる前の年に宮岸君も同じ教室に神経組織の形態学の勉強にきておられました。私と彼とはちょうどすれ違いになり、解剖学教室での彼の勉強ぶりを自分でみることはできませんでしたが、彼は連日夜の更けるまで電子顕微鏡を観察し、解剖の先生達があの小さな身体のどこにそのようなエネルギーが貯えられているのか不思議に思った程であったとあとで聞かされ、学生時代と少しも変わっていないことに驚嘆いたしました。私は彼の研究についてほとんど知りませんが、今日まで彼の主要な研究領域である神経病理学の分野において大きな足跡を残されたことは十分察せられることであります。今後さらに旭川医大精神医学講座が世界でも有数の教室に発展されんことを同級生の1人として応援しております。(解剖学第二講座 教授)

旭川医科大学談話会

第38回、第39回、第40回の旭川医科大学談話会は、それぞれ昨年11月15日(水)、本年1月17日(水)、2月21日(水)に次のとおり行われました。

なお、第40回談話会をもって、昭和53年度の実施予定分がすべて終了しました。学生・職員の熱心な聴講に感謝するとともに、今後とも協力をお願いします。(学生課)

■ 第38回談話会 昭和54年11月15日開催 ■

脊髄牽引障害に関する 実験研究

原田 吉雄

近年、手術手技及び装置の改良に伴い、脊柱変形に対する矯正手術が広く行われるようになったが、術後の脊髄麻痺の報告が絶えず、術中に脊髄麻痺を予知する確実な脊髄モニタリング法の開発が緊急課題であった。術中の脊髄モニターには脊髄誘発電位を測定し脊髄機能障害を知る方法と Neurolept Anesthesia (NLA) 麻酔下で術中に一時的に覚醒させ運動機能をチェックする wake up test 法の2つが一般的である。しかし wake up test 法は手技及び判定上に問題があり、更に運動麻痺をチェックするだけで脊髄全体に加えられた影響を正しく知り得るかという疑問を解決しなければ安全な方法とは云えない。そこで牽引による種々の程度の脊髄損傷を実験的に作成する過程で wake up test 法及び誘発脊髄電位法による脊髄モニタリングを行ない、両者の有用性を比較検討した。

実験方法 10kg前後の成犬20頭に挿管、ハロセン麻酔下で血圧、EKGをモニターする。第1及び第2腰椎椎体に

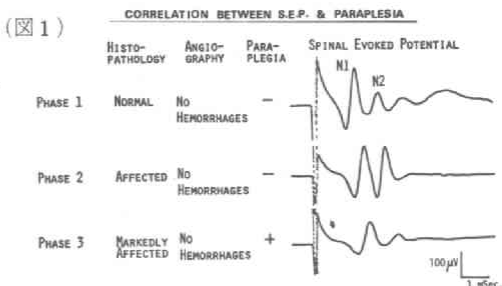
特殊牽引装置を装着し、第1・2腰椎椎間レベルで脊髄硬膜周囲の組織を輪状に切離し、牽引力が脊髄に直接、効果的に作用する様に工夫した。脊髄誘発電位(以後S.E.P.と略す)を発生させる電気刺激は0.1mSec、10Hzの矩形波を第7胸椎硬膜外腔に挿入した双極カテーテル電極から supramaximal で与え、記録は第4腰椎硬膜外腔から単極誘導し不関電極の位置は同レベルの棘間韌帯上に取った。S.E.P.はsignal processorで32~64回の平均加算を行なった。

牽引は5mmを一単位とし、10分間持続後 wake up test により麻痺の有無を調べ、S.E.P.を記録した後10分間完全に牽引を除去す。この操作を麻痺の発生するまで繰り返し、脊髄に加えた牽引とS.E.P.の変化及び運動・知覚障害との関係を追求した。そして可逆性麻痺の出現する点 critical point を発見し、そこでの脊髄の状態を病理組織学的、脈管学的に検索した。

結果 脊髄刺激によるS.E.P.の基本型は図1 Phase 1 に示す如く振幅10~100 μ Vの潜時の短い2ヶの陰性電位及びこれに続く小さい電位群から成る。この第1電位(N1)と第2電位(N2)の振幅と潜時を比較の指標とした。

牽引実験結果には一定のパターンがある。即ち牽引を増していくとN1、N2相互間の関係は一定のまま両電位の潜時は延長していき、次いでN2の電位が上昇するが(Phase 2)更に牽引を増加していくと遂に著明な潜時の延長と共に電位が低下する(Phase 3)。一方、wake up test では両電位低下を観察してから10分後にパラプレジアを示した。この時点で牽引を0に戻すと30分以内に両電位の回復と共にパラプレジアも消失した。このcritical pointでの脊髄には病理組織学上、出血巣は全くないが脊髄実質に亀裂が多数あり血管の剝離像を認めた。又脊髄血管造影でも血管の破裂、途絶を示す所見を認めなかった。

考按及び結論 以上の結果から wake up test でも術中、パラプレジアを発見出来るがこの時にはcritical pointを超えているか或るいはcritical pointで牽引が持続されている為に脊髄麻痺が証明されるので発見した時には脊髄に非常に強い障害を組織学上認められる。これに反しS.E.P.では脊髄機能を経時的に観察出来る為、脊髄に軽度の牽引が加わりN2が一時的に上昇した時或るいはN1・N2が低下するや否や牽引を除去すれば脊髄の障害が無い中に何らかの処置を講ずる事が出来、S.E.P.法は明かに wake up test 法に優り安全な手術を行い得る方法である。



牽引を漸増するに従いPhase 1 から Phase 3 までの変化が経時的に観察される。

(整形外科学講座 助教授)

■ 第39回談話会 昭和54年1月17日開催 ■

The Study of English at the Idai

D. Michael Flint

In order to improve my teaching methodology and to gain greater insight into Japanese students' attitudes toward the study of English, I conducted a motivational survey at the Idai and Kyoikudai during October of 1978. The immediate thrust of the projected was to establish a motivational index for the two colleges. The ultimate thrust was to broach and attempt to answer some of the perennial questions concerning the study of English in Japan: How is it that some Japanese can learn to speak English quickly and proficiently while the majority, provided similar situations, fail? Why is it that the Japanese can study English for up to ten years yet acquire no remarkable fluency? What motivational factors are involved in this enigma? What socio-cultural factors are involved? What possible motivating factors are involved in making the Japanese willing to learn to read and write English while reluctant or refusing to acquire the aural-oral skills necessary for fluency?

At the Idai 101 freshmen and 50 sophomores were given the survey, but 23 freshmen and 9 sophomores failed to complete the test, for reasons of being absent on one of the testing dates. At Kyoikudai 12 freshmen and 10 sophomores were given the survey: 9 freshmen and 9 sophomores successfully completed it. The Kyoikudai students, a smaller group, was considered a control group for the Idai.

The results of the survey indicate that the Idai freshmen are operating under a 20.5% motivation, and the Idai sophomores are studying under a 21.4% motivation. Kyoikudai freshmen 24.9% and Kyoikudai sophomores 22.69%. Although the motivation of the Kyoikudai students is slightly higher, the difference is negligible. Both colleges are operating under motivation lower than that necessary to acquire fluency. A big

difference, however, was noted in the Kyoikudai students being much more intensely motivated and having a greater desire to learn English than the Idai students. This may be the result of the Idai students' English study being mandatory and the Kyoikudai English students' study being optional.

At the Idai, to help improve the students' motivation increased encouragement is necessary. This can be done by both the English teachers and the faculty in general. At present, there are no strong sanctions for not learning to speak English. A student can survive and become a doctor without speaking English fluently. Thus, a student must rely on his own motivation in his study. The results of the survey indicate, however, the students' self-motivation is not enough. One possible solution to this quandary is to insist that the student pass English. The old program of allowing a student to pass English if he does well in his other courses should be dropped. The student should continue the study of English until he passes the course regardless of how well he does in his other courses. Of course, Japan needs doctors. It would be unjustified not to allow a student to become a doctor simply because he can not speak English fluently. However, all the Idai students are of superior intelligence; were passing English mandatory, the vast majority would pass. Another possibility for increasing the motivation of the students is for the medical faculty to increase the assignments done in English. Also, inviting more English-speaking guest lectures would be helpful. Possibly even a foreign instructor on the medical staff should be considered. At any rate, for the Idai to become internationally respected as a medical college, it must produce students who become internationally well-known as doctors. The avenue to this goal is to produce students who are fluent in English and capable of contributing to international conferences and publications. (外国人教師)

■ 第39回談話会 昭和54年1月17日開催 ■

水銀の動態 —生態学から臨床まで—

土井陸雄

メチル水銀(MeHg)化合物による不知火海岸と阿賀野川流域の水俣病はよく知られているが、他にもMeHg系水虫薬による中毒、液状人血漿中の防腐剤(0.01%エチル水銀)による中毒、種モミの消毒剤(MeHg)による中毒と、日本ではあらゆるタイプのアルキル水銀中毒事件が発生している。これらは、すべて日本の急激な経済成長期に発生しており、安全性への軽視が基本的要因となっている。Hgは電気機器、触媒、薬剤など多用途に有用な重金属であり、現在でも繁用されているだけに、その安全性の確認は重要な課題である。今回は、Hgに関して我々がやっている研究の一部を御紹介し、水俣病が過去のものではないことを知って頂ければ幸いです。

石狩川の水銀汚染：昭和50年に公衆衛生学講座が開設された直後に国策パルプの工場廃水による牛朱別川のHg汚染が表面化し、その汚染経路、環境影響、人への障害等が問題になった。市公営課、旭川高専、当教室の合同調査の結果、汚染源はパルプ原料の木材であることが判明したが、環境影響、人体影響については未知の部分が多い。特に、人体影響があるとすれば、それは水中のHgが魚を汚染し、汚染魚を摂食した人に水俣病症状が出るという形をとるのが一般だが、困ったのは汚染源が単一でないことである。日本は火山国と言われ、火山が多いが、大雪山系もその一つである。火山周辺には水銀鉱脈が豊富で、今は掘り尽されたがイトムカ、竜昇殿などの優良鉱が大雪山を取りまいている。牛朱別川上流の米飯川の水源にも水銀鉱脈があって、この鉱脈から流出するHgが自然界でメチル化され、ウグイなどの魚に蓄積している。河川のHg汚染では、汚染源の上流と下流の比較をすれば、汚染による環境へのHg負荷の状況を大体つかめる。だが、牛朱別川では上流に自然汚染を受ける米飯川が位置し、米飯川産ウグイのHg濃度は他河川産ウグイより高いから、この方法でパルプ工場の汚染寄与率を知ることは出来ない。また、石狩水系のウグイのHg蓄積パターンには、他河川にない特徴—同一地点産の同程度大の魚のHg値が高低2群に分かれる—がある。これは、汚染水域からの廻遊、種差(ウグイ、エゾウグイ、マルタウグイ)、性差、餌の種類、局所的汚染源の存在など様々な原因が考えられるが、未だ断定できる段階に至っていない。しかし、石狩水系、とくに米飯川のウグイを500g/日以上常食すると、そのMeHg蓄積は水俣病発症の危険レベルを越えることもあるから、釣愛好家は注意が必要である。

Hg代謝の個体差：水俣病の発生防止には、汚染源対策、流通(汚染魚の)対策、摂取規制などがある。このうち摂取規制の基本は、人のMeHg最小中毒量を25mg(全身)人のMeHg半減期を70日、安全率を10倍とし、蓄積の公式 $\int_0^t Y_0 \cdot e^{-kt} dt = \frac{Y_0}{k} (1 - e^{-kt})$ (但し、 Y_0 = 摂取量mg/日、 t = 日数、 $k = 0.693 / \text{半減期}$) から許容摂取量を $0.17 \text{mg} / \text{週} 1 \text{人}$ としたものである。また、市販魚のHg濃度基準を総水銀で $0.4 \mu\text{g/g}$ (=ppm) MeHg $0.3 \mu\text{g/g}$

以下として、汚染魚の流通を防止している。しかし、これには抜け道があって、マグロは平均しても $0.7 \mu\text{g/g}$ 位の総水銀値(MeHgは約 $0.5 \mu\text{g/g}$) だが、市場価値が高く、蛋白源として貴重なため規制対象外にされ、また魚好きの人に魚の摂食を禁止する対策もない。さらに、MeHgの半減期70日は平均値であって、実測値は35 ~ 180日と大きな幅がある。従って、例えば半減期120日の人が、MeHg値 $0.5 \mu\text{g/g}$ のマグロを毎日300g食べ続けると、体内蓄積量は発症レベル(25mg)を越えてしまう。寿司屋、マグロ漁船員など、毎日300g以上のマグロを常食する人は恐らく数万人に上るとすると、半減期の個体差をもっと配慮する必要がある。では一体、何故半減期の個体差が生じるのか。これが我々の一つのテーマである。吸収率は100%近いから問題にならない。考えられる原因の一つは、肝・腎などの排泄臓器に障害がある場合である。医大職員、学生など多くの方のご協力を得て、全血中Hg値を比較したところ、肝機能障害のある患者では明らかに健康人よりHg値が高い。動物実験で、ラット・マウスに CCl_4 で肝障害を起こさせるとMeHgの排泄が遅延することも判った。しかし、これらはかなり重篤な機能障害を起した場合であるから、機能障害が殆どない人々の間にみられる個体差を説明したことにはならない。これには、薬物代謝酵素活性など遺伝的調節機構が関係しているのではないかと考えて、現在実験を進行中である。

「生態学から臨床まで」などと大風呂敷を広げて、結局判っていないことを説明するだけに終わった気もする。忍耐強く聴いて下さった方々に深く感謝する次第です。

(公衆衛生学講座 助教授)

■ 第40回談話会 昭和54年2月21日開催 ■

ホルモン産生下垂体 腺腫の臨床

米 増 祐 吉

下垂体腺腫がホルモンを分泌し、その過剰状態により種々の全身症状を呈することは、古くは1887年Minkowskiの末端肥大症の報告以来良く知られていることである。

治療面でも下垂体腺腫の最初的手術は末端肥大症の治療を目的として1893年Caton & Paulにより行われている。

このように下垂体腺腫はホルモン過剰分泌状態の面からも注目され、脳神経外科医の関心を引いてきた。

脳神経外科の父といわれるH. Cushingは1930年代すでに360例の下垂体腺腫を経験し、とくに塩基好性腺腫による副腎皮質ホルモン過剰状態を報告し、現在でもCushing症候群と呼ばれ、脳神経外科医のCushingを知らない人でもこの症候群を知らない医師はまずないであろう。

しかしその後下垂体腺腫の手術は、視力障害に対する治療が中心となり、ホルモン過剰分泌についてはトルコ鞍内の好酸性腺腫について定位的経蝶形骨手術による熱凝固、冷凍破壊、R・I、埋植手術、放射線療法などが行われてきた。Cushing症候群については中枢性(Cushing病)のものは少ないとされ、副腎の手術が主流となってきた。

最近の内分泌学の目覚ましい進歩、とくにradioimmuno-assayによる各種ホルモンの定量が可能となり、一方ではGuioy, Hardyらによる下垂体の経蝶形骨手術が侵襲も少なく安全に行われるようになり、下垂体microadenomaの摘出手術の経験が積まれるとともに、各種ホルモン異常状態における下垂体腺腫の関与が見直されてきた。

また下垂体および腺腫の内分泌機能についても、電顕、電顕組織化学、組織培養などにより研究が進められ、従来の嫌色素性、酸性性、塩基好性のように単純な組織分類では整理できないことが分り、最近ではホルモン分泌能からの分類も用いられている。

成長ホルモン (GH) 産生腺腫：末端肥大症あるいは巨人症では多くは酸性性腺腫 (70%) によるが、混合型 (18%)、嫌色素性 (12%) もGHを分泌する。50%の症例に視力障害、90%近くにトルコ鞍の変化を伴うことから分るように、内分泌異常のみの状態で診断されることは少なく、発症後平均6年余り経っている。早期に、トルコ鞍の変化が少ない鞍内腫瘍 microadenomaの時期に診断されると、手術により下垂体機能の回復も期待できるが、現状は血中ホルモンの正常化を中心に考えざるを得ない状態である。

プロラクチン (PRL) 産生腺腫：数年前までは非分泌性と考えられていた嫌色素性腺腫の約7%の症例で、血中PRLが高いことが分り、無月経乳汁漏出症候群 (Forbes-Albright症候群) でも血中PRL高値が証明され、PRL産生腺腫によることが分ってきた。腺腫による下垂体の圧迫、あるいは高PRL血症が無月経の原因とされ、通常の頭蓋X線撮影では変化がみられない症例にもmicroadenomaが発見され治療されている。更に最近では女兒の性成熟不全のなかにも下垂体腺腫によるものが多いことが報告されている。早期に摘出手術が成功すれば、正常下垂体機能の回復がえられ、小児の場合は正常な性成熟も期待できる。

副腎皮質刺激ホルモン (ACTH) 産生腺腫：Cushingの報告例のうち8例の剖検例中5例はmicroadenomaで、下垂体の連続切片によりはじめて発見されたものであったが、その後Cushing症候群の大部分に副腎の摘出術が行われてきたことでも分るように、下垂体の病変は臨床的にも、病理学的にも軽視されてきた。最近では副腎過形成は内分泌検査、副腎スキャン、副腎血管造影さらにはACTHの定量などにより診断されCushing症候群の60~70%以上に証明され、下垂体あるいは視床下部に問題があることが分ってきた。経蝶形骨手術により塩基好性、

あるいは嫌色素性のmicroadenomaが摘出され、症状の消失は勿論、下垂体機能の回復がえられた症例の報告が多数ある。しかし腺腫が発見できない場合もあり、下垂体前葉全摘出を要することもある。

視床下部、下垂体のいずれが第一次障害かの問題は手術侵襲の程度を決めるために重要で、視床下部を重視すれば腺腫があっても下垂体全摘を行わねばならなくなる。

この問題はどのホルモン産生腺腫でも問題になることであるが、ほとんどの症例がmicroadenomaの時期に手術が行われるCushing病で最も重要な問題である。

内分泌学の今後の課題でもあり、視床下部ホルモン(因子)の解明が俟たれるが、microadenomaの摘出手術によりホルモン過剰による症状が消失し、下垂体機能の回復がえられる症例も多いので、上記内分泌異常の治療に当たっては、下垂体microadenomaの可能性を検討すべきで、関連各科の協力態勢の確立が必要である。

(脳神経外科学講座 教授)

■ 第40回談話会 昭和54年2月21日開催 ■

創傷と病氣

藤田昌宏

医師は死に対して厳格に且つ親しみの眼でみつめるべきであると言われる。死を客観的に医学生物学的に理解する態度とともに何故死に至ったのかについての分析が要求される。医学的興味という点からは直接の死の原因よりむしろ病因、すなわちその病気の病理形態学や発生論さらに臨床的悪性度判定などが医学研究のテーマとされることが多い。しかし現実的には本当の死因の分析が要求され、数多くの症例で法医学的な追究がなされてきている。

医師は患者の臨終に立ち合う場合や診療時すでに死亡していた場合において死亡の確認と死亡時刻や診断所見を正確に記録し疑惑をもたれる様な不自然な外表所見があれば警察に報告することが要請されている。病死(自然死)であるか外因死であるのかの判別は極めて難しくこの区別こそが法医学にとって重大な課題であることは意外と理解されていない。病死の中には癌などで長期間病床にあった場合以外に急死のケースも多いことは周知であるが背景に黒い霧があればもちろん死因を明らかにさせておく方がよいわけで剖検で外因によるものではなく病死であると確認する例が年々増加している。病気発生から死亡するまで短時間しか経過していない場合や外傷やストレスが加わった場合などでは医療行為そのものも含めて病死か外因死かが問題となることが少なくない。病死において問題となるケースは炎症、心血管系障害、腫瘍などが挙げられ創傷との関連が常に論議され、これらの臨床的病理学的知識を充分持たねば思わぬトラブル

研究室紹介

■ 法医学講座 ■

石橋 宏

法医学は医学以外の自然科学をも含めた広範囲な応用医学である。例えば親子鑑定のためには各種の血液型、血清型、血液酵素型、皮膚紋理等の遺伝形質を把握していることが必要であり、溺水証明のための Plankton、交通事故の際の力学、毒物の化学分析等研究領域は多岐にわたっている。

現在、当教室の研究テーマは①法医個人識別学、②免疫学、③法医病理学の3つが柱になっている。

個人識別の中で血液型に関するものでは、特にT式血液型の研究がある。T式血液型は、最近輸血、妊娠等による免疫抗体(抗Le抗体)で注目をあつめているLewis式血液型と略同じ血液型である。Tは1939年日本で、Lewisは1946年イギリス・ノルウエーで発見された。このT式血液型はS式血液型(分泌型・非分泌型)と密接な関係をもっていて、T型の大部分はs型、t型の大部分はS型となる。その分布率は成人でT型21%、t型78%であるが、出生直後におけるT型は極めて少なく、生後1~2か月経過するとT型は80%位に増加し、生後3年位で成人の分布率に落ち着くという興味ある一面をもつ血液型である。

また、個人識別の中で Superimpose に関する研究がある。この Superimpose 法は白骨死体の個人識別に役立たせるものであるが、頭骨の撮影位置がその成否を決定する。最近、電動式頭骨移動撮影装置を考案試作し、Superimpose 法の合致条件(個人の同定)を数式化すべく努力している。また、同法の他方面への応用(例えば親子鑑定の際の顔貌類似性証明法)についても研究を進めている。

免疫学に関する研究は、薬物(特に免疫抑制剤)投与と免疫抗体価の関係調べているが、多量の免疫抑制剤投与は免疫抗体価を著しく高める作用をもっていることが判りかけてきている。

その他、旭川地方の植物を中心としたレクチンに関する研究も行われている。

法医病理学に関する研究は、死後長時間を経過した組織の変化、病変部組織の死後変化、体表に付着する細菌色素、ミイラ化した皮膚に残存する創傷の鑑別等、従来組織学的診断が不可能とされていた分野に病理学を積極的にとり入れた研究である。

テーマ①②は石橋が中心となり、山口助手が薬学の知識を駆使して実験の一半を受持つと共に解剖後の毒物分析等をも分担している。

テーマ③については藤田助教授が中心となって研究を進めているが、彼は本学附属病院病理部副部長を兼任しているので仲々多忙である。その間、中大路事務官が組織標本作製を手伝い、その他実験器具の整備、事務、オヤツ作製等々研究活動の裏方をつとめてくれている。

(法医学講座 教授)

に巻き込まれてしまう。死体の検査にあたっては幅広い知識を動員して行うことは診療時と同様であるが特に創傷が存在するときは創傷と死因の因果関係の有無が重要となる。その創傷が生前のもか死戦期のもか死後のものかの鑑別が必要であり、因果関係があるとすれば社会的に自為か他為か不慮の災害かが問題となる。健康人が突然死亡して創傷が存在するときは死因がこの創傷である可能性があるが因果関係を明らかにするには十分な知識と判断力が要求される。しかし医学的に判定困難で法律家の判断によることもありうる。剖検においても死因の究明にあたって外因死か病死かを念頭におく訳であるが、最も適確な診断をするには幅広いセンスで種々の専門知識を用いねばならない。中でも体外表の変化が非常に重要なポイントであり創傷に対する知識は重要なウエイトを占める。外科学総論で述べられる創傷の知識であるが外科医的立場と法医的立場では創傷を観察する焦点において治療と原因という差が存在するが根本的には同じであり正確な記録と分析が要求される。創傷における診断は死体であれば①生前か死後のものか②兇器の種類と使われ方③自分でやったか他人か事故なのか④死因との因果関係があるかなどで、生体では患者の訴えのみでなく客観的な予後判定や受傷後経過日数などが治療と並行して判断されねばならない。もちろん生体の傷口の治療と死体の傷口の検査では分析法が異なる。すなわち生活反応の存在で外からの刺激に対し生体でなければおこらぬ反応が死後も証明されるもので重要な所見である。創傷は鋭器、銃器によるものや鈍体作用によるものに分類して用いるのが便利で切創、割創、刺創や射創などと鈍体反応として表皮剥脱、皮下出血、開放性創傷(裂創、挫創など)から外的刺激の及んだ具体的分析が行われる。外力による影響が深部へ及ぶと骨、内臓の破壊がおり、特に頭部外傷では直接機械的外力で損傷を受ける場合や鈍体作用で頭蓋内血管や脳実質が損傷をうけ臨床法医学上問題となることが多い。スポーツ外傷や交通外傷に対する理解も病気との関連上欠くことができず、最近では新聞紙上にぎわし社会問題となっている被虐待児童候群(Battered Child Syndrome)においても外力による生体への影響を考えておかないと発育障害や全身病と判断して思わぬ誤診をする危険性があり、小児を死へおいやってしまう。ここにも創傷と内因的病気との考え方を充分理解し、治療とともにその原因を科学的に探る眼が要求されている。

(法医学講座 助教授)



サークル紹介



本学には現在、体育系28、文化系22の学生団体が設立され延 789名の学生諸君が各サークルで活動しています。

サークル活動は、諸君の個性、能力、技術等を向上させながら、先輩、友人、顧問教官との接触を通して自律性、協調性を修得する場でもあります。豊かな人間性の涵養に役立つ活動は、諸君の大学生活をより充実させることでしょう。

各サークルは諸君のエネルギッシュな若い力を求めています。“これぞ、”と思うサークルであなたも活躍してみませんか。

(学生課)

ラグビー部

最近のラグビー人気はうなぎのぼりであり、正月にはTVで観戦した人も多いと思う。しかしラグビーは「観るスポーツ」でなく、「やるスポーツ」である。我々は1人でも多くの諸君にラグビーの醍醐味をあげてほしい。我々ラグビー部は開校とほぼ同時に誕生して、以来着々と成果をあげてきた。51年以來、市内大学1位の座についているが教育大、東海大等の急追は侮り難いものであり、新人の力を期待している。部員は未経験者が多く素人でも十分やっていける。練習は毎日、グラウンドでやっているの、是非1度見に来てもらいたい。

(責任者 清水重男)

部員	経費	活動
23	会費(シーズン中のみ) 月額 1,000円徴収	5.28~6.4 旭川ラグビー協会会長杯 争奪戦大学の部優勝 10月北海道大学選手権大会1勝1敗 道央選手権大会大学の部優勝



準硬式野球部

新入生の諸君、入学おめでとう!! 大雪山をバックにしたグラウンドで日々白球を追っている姿、それが我が野球部です。野球部は大学開校と同時に創設され、以後毎年着実に実力をつけてきています。ちなみに此処最近では、地区体及び東医体2年連続3位、4位と安定した実績を挙げ、道内の大学でも今や旭医ありといった感じです。しかしこれらの成績・実力が一朝一夕のものではなくそれこそ日々の練習の成果であると我々は思っています。医学部という特殊な事情のせいか部員も高校野球経験者から、大学へ入って初めて野球をやり始めた者まで、その経験・実力は種々ですが、部員全員が一丸となって毎日の練習に励んでおり、これから生まれるお互いの信頼感・連帯感さらには練習の積み重ねによる実力を試合で十分に発揮すること、これが団体競技の良さでもあります。それこそ試合で勝った時の喜びも何倍にもなり、負けた時は各個人の反省も全員のものとし、悔しさもお互いの励ましにより次の試合への糧とできるので。今年の我が野球部も全員一丸となった活動を行っていきます。新入生の諸君、野球の上手、下手は構いません、とにかく野球の好きな人、野球部へ入部しませんか。

(責任者 稲葉雅史)

部員	経費	活動
18	会費月額 1,500円徴収 遠征費を自己負担	5.29~5.31 全国大学準硬式野球道予選3位(三部リーグ) 7.15~7.17 地区体 7.24~7.28 東医体 9.8~9.11 全道大学新人戦

卓球部

卓球部は、本学の開学以来続く、学内で最も長い伝統を持つクラブの1つです。又、部員の数でも20数名と多い方です。その内、女子部員が6名で、女子の団体戦にも出場できる数少ないクラブの1つでもあります。部員の団結も堅く、春の花見に始まる多数の行事もあり、大学生活に潤いを与えます。さて、対外試合などにおける成績ですが、発足当時から着実に実力を上げ、昨年は北医体で念願の3位入賞を果たし、さらに上位を目指しています。又、初心者も多く、皆、時にはきびしく、時には楽しく、練習に励んでいます。どうぞ卓球部へ!

(責任者 外木秀文)

部員	経費	活動
25	会費は入部時 1,000円徴収 遠征費自己負担	10.28~29 北日本医科歯科学生卓球大会3位



陸上競技部

現在のところ我々陸上競技部は、部員も少なく（その部員もほとんど全員が他部との掛け持ちという実情）活動もあまり華々しくはありませんが、各種大会では、団体、個人とも他部をしのぐ成績を上げております。どうですか、一年生諸君!! 経験の有無にかかわらず共に記録へ挑戦してみませんか。今年は、旭川教育大との合同練習など前向きな姿勢で部員一同張りきっている次第です。ひょっとして、君は大選手になるかもしれません。なお、練習は日曜日を除く毎日行う予定です。

(責任者 稲尾茂則)

部員	経費	活動
6	遠征費、大会参加費、連盟加入費自己負担	7.29東医体総合6位、フィールド2位 9.24秋季北海道学生陸上競技選手権大会 その他国体道予選

スキー部

我々はこの旭川の地で何をすべきか。まさか〇〇だけ学びに来たのではあるまい。旭川の冬は長く厳しい。1年の大半が雪におおわれ、我大学の周辺も例外なく一面銀世界となる。この白銀の原野を前にしてどうしてスキーをせよとおられようか。目の前の原野をかけめぐるといい。急斜面をスピードを競って滑りおろるといい。スキー部アイスダンスチーム、アルペンチームは君たちを待っている。[スキー部の歌]ポプラが風に揺れている 世界の友が呼んでいる そうだ僕らも負けないで 勉強・勉強・楽しい集い・旭医・旭医スキー部!

(文責 藤岡文夫)



部員	経費	活動
25	会費月額 300円 徴収遠征費 70,000円 自己負担	4月旭岳大回転 6月支笈湖駅伝

ボディビルディング

ボディビル部は1期生の方が創設したもので、その後部員の出資により色々な器具をそろえ、現在ではほとんどのトレーニングが出来る状態になっています。そのため我々は医学部でありながら、パワーリフティングの成績は北海道の他の大学と肩を並べるレベルになって来ました。医学生は特に運動不足になりがちなので、体力は普通よりは劣ると思います。もし皆さんが体力不足だと思ったなら、ぜひボディビル部の練習を見に来て下さい。きっと皆さんに合った練習法を教えることができます。練習は毎日昼休み、体育館2階で行っていますので、思い当たったら、ためらわずに来てみて下さい。

(責任者 石川雅嗣)

部員	経費	活動
20	会費月額 500円 徴収。遠征費を自己負担	10.15全道パワーコンテスト4位 11.12全道パワーコンテスト新人戦4位

バドミントン部

我が羽球部は開部以来5年、この大学と共に成長し、1期生の先輩らも無事卒業していきました。さらに今年から新入生諸君等の参加により、より良い活動を作り出してくれるものと思っています。すでにこのキャンパスの一員となられた諸君らの、活力ある参加を求めています。

「頭か顔か、または体力に絶対自身のある方」ふるって入部して下さい。 —羽球部一同—

写真は、東医体参加後の独協医大との交歓試合のものであります。

(責任者 小原敦史)



部員	経費	活動
34	会費月額 1,000円徴収 遠征費5~7 万円自己負担	7.26~7.29東医体2回戦出場

バスケットボール部

バスケットと聞けば、「きつい」という印象があるようだが、それは練習しただいで、鍛えた選手では必ずしもそうでない。それには不断の練習と情熱が必要である。我がクラブの目的はそこにあり、それらを基盤にして団体スポーツの楽しさを知り、チームの和を大切にすることが最大目標である。

スポーツが好きで、チームプレイの楽しさを求める諸君は、ぜひバスケット部へ!

(責任者 宮津 誠)



部員	経費	活動
18	会費月額 500円徴収 遠征費自己 負担	5.14北医体7位 7.15~7.16地区体ベスト8 7.25~7.31東医体4位 9.9市民大会

空手道部

入学おめでとう。「ピシーッ!」空手着が鳴る。「セヤーッ!」鋭い気合いもろとも、拳が、蹴りが、風をきり滑り込んでゆく。総勢16名。毎日の練習に励み、合宿で己に鞭うつ者達。活力に満ちた我らの実力は躍進の一途だ。昨年は東医体でベスト8、新人戦では2私大を4-0、5-0で踏み潰し4位。今や旭川では向かう所敵なし。率いるは熊殺し三木田主将、大田統制部長、常勝相沢先輩。情熱の6年生、不動の実力5年生、技の4年生、習練の3年生、伸長著しい2年生。部員中9名が黒帯である。初心者こそ来たれ。押忍!

(責任者 片山英昭)

部員	経費	活動
16	月額400円 試合参加費 自己負担	7.30東医体ベスト8 10.29道学生連盟4位 9.24旭川大会個人2位、3位



柔道部

先日、私が初段になった当時(昭和46年)の「柔道」という雑誌を眺めていた。丁度、第7回世界柔道選手権大会が西独のルドウィグスハーフェン市で開かれて、川口、藤猪、篠巻という懐かしい選手が、6階級中5階級を制覇し、ルスカが重量級で優勝した時だった。同じ年の8月には第2回の全国中学校柔道大会が開かれて、あの山下泰裕が熊本藤園中の先鋒で同中を優勝に導いている。そしてこの年の全道高校柔道大会では、今を時めく道警の高橋政男が中量級あたりで活躍していたに違いない。あれから8年、私は昨年暮れに参段になったが、山下、高橋は五段になっている。えらく違うもんだなアと思うと同時に、勉強と柔道と我ながら良く両立できたもんだなアとも思う。故三船久蔵十段は20才の時に講道館に入門、同年早稲田大学に入学、27才で五段になっている。えらいなあ。

大学時代、勉強以外に打ち込むものが欲しい人、柔道をやってみないか? 札南、札北、札西、函ラ、大阪生野、愛知東海と文武両道の校風を持った各高校の出身者が、君たち後輩の入部を期待して、体育館の2階で待っている。1年まじめにやれば初段にします。

(責任者 大木康生)

部員	経費	活動
12	会費は必要 なつど徴収 遠征費は自 己負担	5月北海道三医科大学柔道大会2位 旭川地区四大学柔道大会兼4位 7月地区体、東医体予選リーグ3位 9.17北海道学生柔道選手権大会

サッカー部

我が部は、少数精鋭という言葉がピッタリである。しかしこれは望ましいことではない。悪く言うと人気がないのである。サッカー部は練習がきついと言われるが、毎年の新入生はこんなうわさを聞いておじけづいてしまう。我々は常に勝つことを目標にしている。だから当然きびしい面もある。強いチームになろうと思うなら、また強いチームならこのクラブでも練習はきびしいのである。サッカーは特に激しいスポーツである。だからきびしい練習が必要である。新入生諸君も勇気を持って。そ

して我々と共に血と汗と涙を流そうではないか。
(責任者 宮本守孝)



部員	経費	活動
17	会費月額 1,000円徴収 遠征費50,000 円自己負担	5~9月旭川社会人リーグ1部2位 6月総理大臣杯全道大会 7月東医 体 9月道北学生リーグ兼インカレ 予選優勝 10月インカレ全道大会ベ スト8

バレーボール部

昨年10月の秋季大学リーグのことである。その大会4連敗と、全敗まであと一つという対北海学園戦で文字通り総力戦で3セット目13:15で唯一の勝ち星をあげた時、昨春バレー部にだまされて入部した4人の1年生が「よかった」と感動に胸震わせた。彼らは皆バレーに関してはズブの素人だったがいつの間にかバスマもサーブもそしてクイックまでも打てるようになっていたのである。そもそもバレーは精神的に凶々しい人間程上達する。「自分は素質がある」と決めつけて練習する奴程適している。毎年公式試合は、5~10月に集中しており、試合数も30位は消化する。本番は優勝の可能性のある地区体・東医体で、その前に合宿を行い練習の苦しさも味わえるし、その打ち上げで本当にうまい酒や料理にもありつける。また、今年は全医体当番校で全国の医学生が旭川に集まる予定もある。身長、酒量、経験などは一切不問。我がバレー部は「やってみようかな」という人間は大歓迎である。放課後の他に毎日昼休みにも体育館で練習しているからジャージを持って(そのままでも結構です。)是非、練習に参加してみてください。

(責任者 玉手健一)

部員	経費	活動
17	会費月額 500円徴収 遠征費は自己負担+部費	5(10)月北海道大学男女バレーボール リーグ春(秋)季大会1部5位(6位) 7月北海道大学バレーボール選手権 大会5位 地区体3位 東医体1位

剣道部

私がこの大学に入学した頃、雪はまだ旭川の半分を覆っていましたが、空は粉れもなくあの春の空で暖い陽差が残っている雪を刻一刻融かしていました。こういう陽気にはよく現れるもので、私もはじめてつきりそれとばかり思っていたのですが、体育館の2階でキエー、チョエーと奇声をするではありませんか。好奇心に駆られて行ってみますと、なんとそれはあの有名な剣道部だったのであります。このクラブは年中この“気合”をかけているのでありますが、これがまた個性溢るもので、現代の脱個性教育に対抗しようものと各界の注目を浴びることになりました。ところで、個性は気合だけに現わるものではなく、剣道そのものにも現れるものであり、たとえ面でその美貌が見えずともそれが誰であるかわかるのです。現在、麗しき女性剣士を含む20数名の剣士が明日のみを信じ日夜稽古に励んでおります。新入生の皆さん、個性溢るる剣道部へ、昨日にとらわれず未来を夢みる剣道部へ入りましょう。尚、防具の心配は要りません。初心者大歓迎!

(責任者 仲谷 了)

部員	経費	活動
22	会費毎月 500円徴収 遠征費自己 負担	5.28春季大会 7.2北海道3医学部剣道大会2位 7.22~23東医体 11.23新人戦

山岳部



山へ!

「何で山に登るの?」マロリーさんなら「そこに山があるから。」と答えるのだけど、「ロマンを求めて(ロマンチスト)、強靱な精神と肉体を養いたい(功利主義者)、大自然に懐かれない(マザコン)、あの登る苦しみがたまらない(マゾヒスト)、他人の苦しむ様が見たい(サディスト)、etc)。そう何でもいいのです。登山なんて2本の足で歩くだけの、山が好きなら誰にでもできる楽しいスポーツなのです。大雪へ、十勝へ、日高へ、あの山々の頂に向かって僕等とともに登りましょう。

(文責 福田真也)

部員	経費	活動
14	山行時の個人装備、個人参加費用を自己負担	5.1~5.4利尻岳東北稜 7.10~7.13ボンクワンナイトムラウシーオプタテシケ夏合宿 12.10~12.12十勝三段山にて山岳スキー

弓道部

今年は東医体の弓道部門が札医大の主管で行われる。千載一遇の機なので、あわよくば優勝をなどと考えている。勝利の酒を酌交したい人、いらっしやいませ。弓は初めてなので、という人も心配無用。先輩の超論理的指導により、1か月でボンボン的に当てさせてあげよう。弓を離れたとき(特にコンパ)の部員たちの生感というのがまた面白い。ここには書かないが、醒めた眼でみるもよし、乗ってさわいで疲れるもよし。とにかく、人類のナマの魂うずまくケオス集団。きみのあらゆる武装を解除してナマ身でアタックしてほしい。待つ。

(文責 伊東隆雄)



部員	経費	活動
30	会費月額500円徴収 遠征費・道着類自己負担	6月北部地区選手権優勝 8月東医体5位

大東流合気武道クラブ

大雪連峰の大自然にかこまれるわが大学に、合気道部が創立されてから早3年がたとうとしています。合気道は、老若男女を問わず誰にでもできるスポーツとして近年とみに盛んになってきました。

合気道には、力は、いりません。競う必要もありません。ただ自然の流れにとけこむ心構えを養うものです。

現在、温厚な星川部長の指導のもとで、医大学生部員のほか、社会人の人達も加わり稽古にはげんでいます。どうです、みなさん、どんなものかやってみませんか。興味のある方は体育館2階の道場へ来て下さい。

(文責 中山一雄)



部員	経費	活動
5	会費月額500円徴収	8.6大東流合気武道演武大会

軟式テニス愛好会

発足して3年目比較的新しいクラブですが、新入生の皆さんを迎え、新たな段階に向う軟式テニス愛好会です。会員は、老いを知らぬ5年生を中心に我ら若輩も、昼休みの時間や、講義の空いた時などを有効に利用して、適当にコートに集合しては白球を追ひ、いい汗をかいています。まなクラブ活動以外にも勉強その他(試験等)の面で、いろいろと役に立つことも必ずあると思います。

入会時は、皆初心者でしたが、「技術部長」の指導や各人の「秘密練習」の成果もあって、ほぼ定期的にゲームもできるほどになっています。また機会をみつければ圧倒的に強い(女子)職員の方たちともゲームをしてきました。今年は更に他大学の軟庭クラブ、同好会とも交歓試合などをしてみたいと思っています。

とかく運動不足になりがちな大学生活ですが、軟庭愛好会で気軽に汗を流して、自分の健康管理の一助としてほしいと思います。では限りなく美しいテニスを目指して。

(文責 秘密練習者)

部員	経費	活動
18	会費は必要など徴収	

スポーツ愛好会

スポーツが好きだ、何でもやろう!しかしながら、運動部として拘束されたくない、と言った勝手気ままな人間が「集」をなした。それが我が会である。

とにかく、自他ともに認めるスポーツ万能選手の集合体である。どんどん他流試合を申し込まれたい。見事返り討ちにしてくれるわ。

我が会の特徴を列挙すると……

一、ヤクルト・スワローズの熱狂的支持団体である。国鉄スワローズの昔より、毎年毎年Bクラスに甘んじた「スワローズ」を心配そうにみて過ごした、そんな歴史がある。同球団のチームワークプレーは、即、我々の見本でもある。高度に複雑化する医療に対して、独善的な個人プレーはむしろ害となる。一人一人が力一杯努力して勝利する、そんなさわやかさが大好きである。超大物など、くそくらえである。

二、新入部員を認めない。いかに我が会が人気があり入会希望者が殺到しようと、ガン／＼としてお断りし続けた。何故？理由は、2期生ばかりの集団だからである。従って、間もなく我が会は消滅する。誇り高く 自懐するのである。崩壊まで あと 365日。

(責任者 道藪 裕)

部員	経費	活	動
11	一切なし		

アイスホッケークラブ

ゾーンというフェンスへの激突音、全速で滑るプレイヤー同士が氷上でぶつかりあう肉弾戦、そうかと思えば、フェイントを使って相手をかかわしていく細かさ。そうです。この力強さ、繊細さ、これこそアイスホッケーの真髄です。あなたはこんなアイスホッケーに魅力を感じたことはありませんか。

「こんな寒いところで、スケートをできないなんて、可笑しい。」ということで、我が部が産声をあげだのが去年の12月1日。本学にスケートリンクが無いという厚い壁を乗り越えて、今冬は地道に活動を続けてきました。部員は若干1名を除いて、みな今年はじめてアイスホッケーをやったという人間ですから、技術的に初心者だからといって、何のハンディキャップもありません。どうです。あなたもやってみませんか。本学が東医体主管となる近い将来までに、あなたと「旭医にアイスホッケーあり。」といわれるクラブにしようではありませんか。多くの新入部員を期待しています。

(責任者 伊藤善也)

部員	経費	活	動
15	会費は必要 なつど徴収		

写真部

写真を撮り、それを見ることの楽しさは誰もが知っていることです。しかし、写真の面白さの半分は暗室の作業にあるということを知っている人はあまり多くありません。真白な紙の上にものの形を焼きつけて写真を作り上げる感激は、写真を撮る者のみが知る楽しい世界なのです。

昨年度は各種のコンテストに入選するなど、わが写真部にとって充実した年でした。今年度は写真展をより一層充実させるとともに、撮影旅行に行く計画などを立てております。写真部の活躍を御期待下さい。

(責任者 錫谷達夫)



部員	経費	活	動
16	会費年額 2,000円必 要なつど徴 収		

医療研究会

文化系サークルの中でも、ひときわ行動力を誇るのが、我が医療研です。近い将来、医者や研究者になった姿を心に抱きつつ、現代医療の現実を垣間見んと、大学の内外を飛びまわっています。社会学的調査と、検診を組み合わせたフィールド・ワークは、全国でもユニークなハイレベルなもので、過去4年に渡って、白滝、天売、沼の上で行なわれました。地域の方々との交流の中で得られたものが、私達の活動の源です。週1度の学習会では、「医療とは。医学とは。そもそも大学生活とは。」と議論をぶつけ合っています。気軽にサークル室まで、おいで下さい。

(責任者 佐々木悟)

部員	経費	活	動
23	会費毎月 200円徴収		



映画研究会

新入生諸君ノ君達は大学生としての必要かつ十分条件をどのようにお考えか？ 受動的な教育段階を終えた君達は今度は能動的に、自分の選択した学問に専念し同時に幅広い教養を身につけていくべきだ。そして最終的にはそのvarietyに富んだ教養の中で自己というものを確立してゆく場が大学という場なのである。ところで教養を身につける一番popularな方法はやはり読書である。それは活字として表現された種々の文化を吸収する方法だ。しかし人類の創った文化ジャンルはまだ多岐に渡っている——Feelingの体験を表現する音楽、映像という手段により芸術を表現する映画etcは数えきれない。諸君ノ映画研究会で映画という文化ジャンルの1つを体験してみないか・・・とは言っても我々は映画の専門家でも何でもない。ただ趣味的に鑑賞したり創作したりしてみようという建前のクラブである。現在旭川には名画座がない、そこで一般市民と共に映画史上見逃せない名画を鑑賞してゆこうと自主上映活動が我々の活動の中心となっている。蛇足だが我々クラブのコンパの回数は本校随一である。即ちそれだけ部員同士のcommunicationが豊富な大学生活を謳歌するに相応しいクラブだと思っている。どうか気軽に部室を訪れてほしい。

(責任者 中山桂司)

部員	経費	活動
20	会費月額 300円徴収	第7～12回名画鑑賞会

Jazz研究会

私達ジャズ研は演奏するグループです。ジャズの好きな者同志集まって好みの曲を演奏したり、時々コンサートを開いたりして楽しい活動を行っています。第1期生から第6期生までそれぞれに自分の個性を生かしながら演奏を続けて来ました。わがジャズ研でみんなと合わせて演奏してみませんか。ジャズのとりこになることうけ合いです。時にはジャンルの違う音楽を奏でてみたりもします。部員は音楽をこよなく愛している者ばかりで

す。楽器演奏者、ヴォーカリストも含めて、いつでも大歓迎です。

(文責 脊尾太規子)



部員	経費	活動
9	会費月額 500円徴収	6.4 札幌大学祭友情出演 11.8 サンシャインマーケット医大ジャズ研出演 12.9 メキシコ4大学ジャズ研コンサート出演 1.1 メキシコオールナイトジャズセッション出演

囲碁同好会

我が囲碁同好会は今年の4月で結成1周年を迎える。それと同時にクラブ昇格を勝ち取る事になるだろう。以前本大学に囲碁クラブが存在して居た事は聞いて居るが、52年4月に自然解消して居るので、即ち再建という事を意味するだろう。然し今回の第2次囲碁クラブはその性格を異にして居る。それは教職員も含めた団体にしたいという意図があるからである。この意図は本大学にあまねく囲碁を普及させたいという強い願望から来たものである。最も勝れた頭の体操である囲碁を覚えそして強くなろうではありませんかノ旧囲碁クラブのボスであった岡村氏4段(5年)を始めとして数名の有段者が居り、尚更に数名の入段の近い会員も居り、正に旭川地区の学生囲碁のレベルアップの旗頭的な存在になろうとして居ります。クラブ昇格の暁には、全国大会を目指し各種全道大会に団体レベルで出場する予定を立てて居ります。残念乍ら、現在本同好会には女性会員が居りません。今日全国的に女性の囲碁熱が高まって居る時でもあり、女子職員、学生の入会を強く望んで居るのが現全会員の一致した熱望であります。ゆったりとした和室で囲碁を楽しもうじゃありませんかノ

(文責 佐藤孝生)

部員	経費	活動
13	会費年額 1,000円徴収	9.2 旭川地区学生囲碁大会2位

奨学制度について

この制度は、学業成績優秀かつ経済的理由により修学の困難な学生に奨学金が給・貸与されるものです。本学で取り扱っている各種奨学金制度は下記のとおりです。

貴重な学生生活の中で少しでも勉学に専念できる時間的余裕を得たいと願う諸君にとって、こうした制度の利用は、学生生活をより豊かなものにしてくれますので、希望する学生は、自分の条件等に適した制度に応募されるとよいでしょう。

(学生課)

昭和53年度日本育英会等奨学金資金受給者数

昭和54年1月現在

区 分	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計	貸与月額
日本育英会 特別	15	17	14	14	16	18	94	533年度 自宅17,000円 自宅外23,000円
〃 一般	11	12	22	18	10	13	86	533年度 15,000円
日本通運育英会		1					1	10,000円
北海道医学修学資金		3	3	4	13	12	35	50,000円
交通通児育英会 (財団法人)			1				1	20,000円
明治製菓育英会 奨学金			1				1	15,000円
大阪府育英会			1				1	5,000円
杉村先生記念 財団奨学金			1				1	15,000円
長野県医学修学資金			1		2	3	6	20,000円
福井県医学修学資金			1				1	50,000円
南条育英会			1				1	10,000円
旭川ロータリー育英会 財団奨学金			1				1	6,000円
深川市奨学金				1			1	15,000円
登別育英会 (財団法人)				1			1	8,000円
北海道厚生 医学修学資金					4	3	7	50,000円
川崎市公衆衛生 修学資金				1			1	30,000円
旭川市奨学金			1				1	10,000円
兵庫県へき地勤務 医師等確保修学資金					1		1	40,000円
住友生命奨学生					1	1	2	20,000円
知内町奨学金				1			1	6,000円
日本交通文化協会 英才教育事業部						1	1	10,000円
紋別市奨学金						1	1	8,000円
網走支庁母子 奨学金						1	1	8,000円
神奈川県公衆衛生 奨学金						1	1	40,000円
津別町奨学金						1	1	10,000円
公的医療機関振興 奨学金						1	1	30,000円
小川育英会 (財団法人)						1	1	25,000円
青森県へき地勤務 医師等確保修学資金					1		1	40,000円
東京都公衆衛生 奨学金						1	1	30,000円
合 計	26	33	47	40	46	58	250	

※ 日本育英会奨学金貸与月額額は昭和48年度から50年度入学生は一般貸与6,000円特別貸与自宅8,000円自宅外12,000円であり、昭和51年度及び52年度入学生は一般貸与11,000円特別貸与自宅13,000円、自宅外18,000円である。

日本育英会受給者数に対するその他有英会重複受給者延数

区 分	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計	備 考
特別貸与	0	2	2	1	6	8	19	
一般貸与	0	1	6	5	2	2	16	
合 計	0	3	8	6	8	10	35	

在籍者数 588名 実受給者数 223名 実受給者率 37.9%

スキ ー 遠 足

毎年第1学年学生を対象に行っているスキー遠足が本年は去る2月7日(水)にキトウシ国際スキー場で実施された。当日は黒田副学長をはじめグループ担任4名、学生95名が2台のバスに分乗し出発。スキー場では午前9時の班別練習、午後からの自由練習と、参加学生はスキー授業での成果を発揮しおのびおのびと滑っていた。天候に恵まれ負傷者もなく、楽しい思い出を残し無事終了した。

(学生課)

第2回歩くスキー講習会

前日から降り積った新雪とスキー日和に恵まれた1月10日・17日の2日、本学周辺及び神楽岡公園林間コースで1年生16人が歩くスキーに初めて挑戦、靑空のもとでさわやかに汗を流した。

参加した学生は、講師から歩き方やワックスの塗り方などの説明を受けたあと、田圃の新雪あるいは公園林間コース3kmにチャレンジ。談笑したり、記念写真を撮りながら歩いた2時間は、瞬刻間に終わった。(学生課)



卓 球 講 習 会

去る1月31日(水)、午後1時から4時30分まで、本学体育館に於て、手軽なスポーツである卓球に親しむことを目的に講習会が実施された。受講生30名は、講師の号令により、準備体操、トレーニング、練習方法の指導を受けた後、3つのグループに分けられ、初級は球の返球、中・上級は実戦を通して欠点等の指摘による、指導を受けた。最後に柳原、椋下両氏による模範試合が行われ、講習会は盛況のうちに終了した。(学生課)

第5回全学スポーツ大会

第5回全学スポーツ大会は、去る1月18日(木)から1月25日(木)までの8日間、サッカー、卓球、バドミントンの3種目にわたり開催されました。学生、教官、事務官による各参加チームは賞品の肉まん、コーラ獲得をめざし、健闘しました。結果は次のとおりです。

サッカー 1位3A 2位1A 卓球 1位事務官 2位教官 バドミントン 1位教官 2位事務官

(学生課)

道路交通法の一部改正について

昭和53年12月1日から改正道路交通法が施行されています。その中から、本学では自転車通学の学生が約20%おり、その他の学生諸君も自転車を利用する機会が多いと思われまので、ここに“自転車の通行方法の改善”についての内容を掲載します。(学生課)

■自転車道の通行義務—普通自転車は、自転車道が設けられている道路においては、例外を除き、その自転車道を通行しなければならない。(例外…①自転車道以外の車道を横断するとき ②道路の状況その他の事情によりやむを得ない場合)

■普通自転車の歩道通行の方法—普通自転車は、左図の道路標識等がある歩道を通行することができる。ただし、次のことを守って走行しなければならない。①標識などによる特別の指示がない場合は、車道寄りの部分を徐行すること。②歩道上に自転車の通行すべき部分が、標識などによって指示されている場合は、その指示された部分を通行し徐行すること。③



自転車横断帯の標識

歩行者の通行の妨げになるときは、一時停止すること。

■自転車横断帯の利用—①自転車は、道路を横断するとき、付近に自転車横断帯があるところでは、その自転車横断帯によって横断しなければならない。②また、交差点やその付近に自転車横断帯が設置されている場合は、その自転車横断帯によって、その交差点を進行しなければならない。

■交差点への進入禁止—普通自転車は、交差点またはその手前のすぐ近くに、交差点への進入を禁止する道路標識があるときは、その交差点に入ってはならない。

■自転車のブレーキ装備義務—総理府令で定める基準に適合する制動装置を備えていないため、交通の危険を生じさせるおそれのある自転車に乗ってはならない。

■反射器材・尾灯の装備義務—夜間または視界が50メートル以下のトンネルや濃霧などの中を通行するときは、尾灯を点灯するか、総理府令で定める基準に適合する反射器材をつけて自転車を運転しなければならない。

窓外



並木正義

— 一期生の卒業に思う —

旭川医大にも第1回卒業生の出るときがやってきた。早いものだとも多くのひとはいうが、一期生にしてみれば早かったか、遅かったか、それぞれによって感じ方は違うであろう。断片的な楽しい思い出はあるかもしれないが、全体としては苦しみの6年間であったと思う。

一期生というものは、なにかしら宿命的な苦勞と使命と責任を背負わされているように思う。そのためか一期生の顔には、なんとなく悲壯感のようなものがただよっていて、廊下ですれちがっても見分けがつく。新設医大のさしあたっての具体的評価を国家試験の合格率で云々する風潮があるが、そうなると一期生というのは責任が重く、つらいものである。いずれにしても国家試験はさっさと合格するにかぎる。また一期生には後輩のものを考えて行動しなければならないといった責務のようなものがつきまとっている。その意味からも卒業したら各教室に広くちらばってほしい。どこの教室に行っても、そこには誰か先輩がいるというかたちは、後輩にとって心強いし、望ましいことだ。もちろん母校だけにとどまらず、全国に羽ばたくのも結構なことである。誇りをもつ

て大いに広く羽ばたいてほしい。

卒業後の自分のすすむべき道を決めるということは、たやすいようでなかなかむずかしいものである。卒業生の大部分は臨床にすすむのであろうが、臨床よりもむしろじっくりと基礎医学をやるほうがむいているひと、またどうしても臨床にはむかないひと、同じ臨床でも、内科系にむいているひと、あるいは外科系にむいているひとなどがあるものだ。私は以前から教室にはいりたいと言ってきた、必ずしもそれを受け入れず、もっともそのひとの適性にあつた方向をすすめるようにしてきた。この点では不思議と誤診がなかったと思っている。医者としての具体的な適性を判断する根拠は、私の骨相学の裏付けと、そのひとの性格傾向や人間性をすばやく的確に見抜くための長年の厳しい修練による経験的事実に基づくものである。まだどちらの方向にすすんだらよいか決めかね、迷っているひとがいるなら相談にくるとよい。かつて北大にいた頃、卒業近くなると、学生はずいぶん相談にきたものである。今年から行われる入試のときの面接試験では、将来医者にはいけないようなもの、つまり誰がみても医者としての適性に欠けるものを大ざっぱにチェックするわけであるが、医学生については、卒業の時点で今一度その適性を細かく吟味し、ほんとうに本人のためになる将来の方向づけをしてやる必要があると思う。教官は大きな観念にたつて、学生のすすむべき方向の相談にのってやっていただきたい。

最後に卒業生に一言。私がいつも言ってきたように、どうか“病人を治せる医者”になってほしいと願うものである。

(内科学第三講座 教授)